
ハリー・ポッターの弟は母親似

かんと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハリー・ポッターの弟は母親似

【Nコード】

N1994V

【作者名】

かんと

【あらすじ】

神の手違いで死んでしまった主人公はチート能力を授かる。けれど転生先はハリーポッターの世界。ただのチート能力で大丈夫なのか？

そんなハリーポッターの弟が魔法世界で頑張るお話。

ハリー・ポッターの弟は転生者から改題しました。

プロローグ（前書き）

ハリポタ最後の映画を見て感動して書き始めました。
更新は不定期になると思いますが見てくださると嬉しいですよ。

プロローグ

ここは、どこだ？

天界じゃよ。

展開？

いわゆる神様のいる世界じゃよ。

おk。

なんでここに俺いんの？

死んだからじゃ。

何故？

儂が御主の寿命と他の奴の寿命を間違っ
て操作してしまったからじ
ゃ。

本来なら後70年は生きれたぞ。

ということは……86？

そんなもんじゃ。

まあ、死んだもんは仕方ないし、
どうしようもできないんだろ？

そうじゃ。

それで普通に死んだら輪廻転生とか言うやつで、転生するんだろっ？
ミジンコとか、ミジンコとか、ミジンコとか。

そんな所じゃ。

俺の場合は？

御主には70年分の何かプレゼントするためにここにきてもらった。

ちょっと待て。

お前のせいで早く死んだのに、慰謝料はないのか？
70年分は少なすぎるんじゃないのか？

分かっておる。

まずは何が欲しいか聞いてからにしようか。

それって転生したときに使えるってこと？

そうじゃ。

それじゃあ、まず俺ってどこに転生するの？

ハリーポッターの世界じゃ。

原作時期と同じじゃな。

というより、ハリーの双子の弟じゃ。

多世界解釈でFA？

FA。

じゃあ、音使い。

零崎曲識さんの能力を十全に使わせて。
作曲とかの才能センス付きで。

他には？

曲弦師。

姬ちゃん的能力をこれまた、十全に使えるようにと、才能センス付きで。

まだ大丈夫じゃぞ。

人間以外の生き物、ウイルスみたいに意思があつて、しゃべれるのも対象に含んで、懐かれるようにして。

あとしゃべれるように。

まあ、幻獣使いみたいな感じ？

厳密に言うとは違うけど。

あと1つくらいかの。

じゃあ、箱庭に幻獣入れて頂戴。

フェニックスとかバジリスクとか白面金毛九尾の狐とかさ。

できればペンダントにして。

べつには入らないから。

動物の保管庫みたいな感じだな。

あと1年分余っておつておるがどうする？

そこまで大層な願いはできんぞ。

ハーマイオニーが少し気になる程度。

セブルスを疑うのをためらう程度。
を深層心理に入れて、記憶は引き継がない。
そのかわり能力は使えるように。

記憶はなくていいのか？

俺と知ってる話と異なるだろう？
弟なんてハリーにはいなかったし。
だからあっても無駄だし、俺って死んだんだよね？

そうじゃ。

なら俺の死って何なんだろうね。
能力貰って記憶持ったまま転生して、それって前の俺とは違うだろう？

それに残りの寿命分の能力だよな？
貰ったら寿命使ってるから死んでるのと一緒にじゃん。

まあ、慰謝料で記憶引き継ぎしてもいいかもしれないけど俺が納得
いかないんだよ。

俺は死んだ。
ハリーの双子の弟になった俺は何故か能力を持ったラッキーな子。
それでいいんだよ。

そういうもんかの？
それと、魔法の世界なのに魔法はいいのか？

プロのプレイヤーの技術を原作以上に使えば何ら問題ない。
そうそう、先に言った2つもさ、右手のブレスレットがたで何でも
楽器を出せるようにと、左手のブレスレットで糸、材質はオリハル
コンとかヒイロカネとかで出せるようにしてくれない？

それくらいはいいぞ。

まあ、ポッター家なら魔法の才能やセンスも十分にあるから大丈夫じゃ。

それもそうだな。

ペンダントとブレスレットは、ヴォルデモート襲撃のときに母の形見みたいな感じでつけるぞ。

ただし、外したりすることはできなくするからの。

盗まれでもしたら大変じゃからな。

まあ、御主専用じゃからそんなことはないと思うのじゃが。それと能力は努力しないと無理じゃぞ。

十全といってもある程度の努力は必須じゃ。

そりゃそうだな。

ありがとう。

それじゃあ逝ってこい。

うん。

字が違うね。

そして、下に穴があくのは決まってることなのかあああああああああああああ！！

プロローグ（後書き）

7 / 31 俺が記憶を消した理由を入れました。これで説明つきますかね？ ちよっと違うんじゃないかなどの感想があればお願いします。できる限り皆さんに納得してもらえるよう改稿していきます。

生き残った2人の男の子（前書き）

今回は原作の台詞を引用してたりします。

生き残った2人の男の子

プリベット通り4番地の住人ダーズリー夫妻には、どこを探したってこんないい子はいないということが自慢なダドリーという息子がいた。

そんな彼らは絵に描いたように満ち足りた家庭だった。

けれど、彼らにも秘密が1つある。

ダーズリー夫人の妹は魔法使いだったのだ。

その妹はポッター家に嫁いでいった。

そこまでは知らぬふりで通せるからいいでしょう。

ポッター夫妻にも子供がいたのだ。

そしてその子供が今後ダドリーに関わるのではないか気でないのだ。

そう、ダーズリー夫妻は未来が怖いのだった。

だから、ダーズリー夫妻はポッター一家を遠ざけていた。

けれど、そんな幻想は長く続かない……………。

『例のあの人』が死んだ。

このニュースはあっという間に広まった。

この日魔法使いは魔法の秘匿など考えることもなく喜び合った。

こんなに嬉しい日はないと。
こんなに気分が良い日はないと。

マグルから見ればかなり奇妙だったに違いない。

けれど、そんな中でも喜べない人もいる。
その中の1人ダンブルドアは悩んでいた。

予言の子が2人もいて、その一方は『例のあの人』を消していたからだ。

消した子、ハリーの方は今後魔法界ではその名を知らぬ有名人えいめうになるだろう。

しかし、偶然生き残った、運良く生き残ったハリーの双子の弟、ジ
エレミーは有名人の弟は何なのだろうか？

——有名人えいめうの弟。

この子も有名にはなろう。
けれどそれは、兄のおこぼれ。
ハリーの弟としてだけ……。

どう思うかは分らん。

いや、弟アパーフォースなら分かるかもしれんが。

だが、どちらにせよ預けねばなるまい。

ダーズリー一家に。

親戚であり、魔法界から切り離せる場所。

けれども、忌避すべきことはある。

この子たちをどう扱うか。

知っている限りはマグルの中ではあまり良いとは思わんが、それがマグルらしいといえはらしかった。

だから、手紙を書いた。

それで全てが伝わるとは思わん。

しかし、そうするしか儼らにはできないのだ。

そこまで考えると、猫がこちらを見ていたことに気付く。

「マクゴナガル先生、こんなとこれろで奇遇じゃのう」

そう声をかけると、女の人を表れた。

「どうして私だとわかりになりましたの？」

「まあまあ、先生。あんな力チコチなすわり方をする猫なんていやしませんぞ」

このマクゴナガル先生も、ハリーのことを心配で来そうじゃ。ポッター夫妻とはそれなりに親交があつたからそれは分かる。ただハリーが心配できたという所が儼は心配じゃ。

「ねえ、ダンブルドア。手紙で一切を説明できるとお考えですか？ 連中は絶対あの子のことを理解しません！ あの子は有名人です——伝説の人です——今日のこの日が、ハリー・ポッター記念日になるかもしれない——ハリーに関する本が書かれるでしょう——私

たちの世界でハリーの名前を知らない子供は1人もいなくなるでしょう！」

そのとおりじゃ。

そして、ジェレミーはほとんどの魔法使いが知らぬ人物となろう。
光が強いものの影にあにいるのじゃから。

低いゴロゴロという音が夜のプリベット通りの静けさを破る。

ライトが見えないか探しているうちに音はどんどん大きくなり、見つけた頃には爆音となっていた。

巨大なオートバイに乗った巨大な男。

その男の手の中には2人の子供が抱かれていた。

儂とマクゴナガル先生が毛布の包みをのぞき込む。

かすかに見えるのは男の2人の赤ん坊だった。

ぐっすり寝ている。

漆黒のふさふさした前髪、そして額には稲妻のような傷の形。

「この傷がああ……」

「そうじゃ。一生のこるじゃろっ」

「ダンブルドア、なんとかしてやれないんですか？」

「たとえできたとしても、儂は何もせんよ」

そう言いながらもう1人の子を見る。

ハリーとは違い深紅のリリイ似のふさふさした前髪、両手にはまっている紅と蒼のブレスレットと、首にかけられている美しい色合いと形をした箱形のペンダント。

リリーのお気に入りのお品じゃったな。

これが形見になるとは……

「ハグリッドや」

別れのキスや涙を流しながらハグリッドが優しく置く。

「これですんだ。もうここにいる必要はない。帰ってお祝いに参加しようかの」

こう言ってマクゴナガル先生とハグリッドに帰るよう促す。

「幸運を祈るよ、ハリー、ジェレミー」

消え入るような声でつぶやき、去っていった。

こうしているこの瞬間、ハリーの与り知らぬ所で、あちこちでひっそりと集まり、杯を挙げ、ヒソヒソ声で、こう言ってるのだ。

「生き残った男の子、ハリー・ポッターに乾杯！」

そして誰しも突っ込まない。

ジェレミー・ポッターも生き残っているとは……………。

ダドリーの誕生日

ダーズリー夫妻が目覚まし、戸口の石段に赤ん坊が2人いるのを見つけてから、10年近くがたった。

プリペット通りは少しも変わっていない。

けれど、ダーズリー家の居間はほんの少し変わっていた。

ダーズリーの写真ばかり並ぶ暖炉の上だが、1つだけ黒髪の男の子の制服写真があった。

その男の子は額に稲妻のような形の傷を持っており、眼鏡をかけはにかんでいる。

これは、この家にダーズリー夫妻とダドリーの3人以外にもう1人住んでいる気配となっていた。

しかし、深紅の髪の毛の子はそこにいた。

今はまだ眠っているが、もう、そう、長くは寝てられないだろう。

「さ、起きて！ 早く！」

おばさんの甲高い声と、ドンドンと戸をたたく音で目を覚ます。

「起きるんだよ！」

と、金切り声がした。

急いで、起き上がり支度をする。

ダドリーのお下がりの服に、兄さんのお下がりの服。

お下がりばかりの服装で身を固める。

穴のあいた靴下や、つぎはぎだらけの服。

けれど、これしか着る物がなかった。

初めは兄さんにもお下がりを着せていたようだが、大きくなるにつれて、2人分もお下がりの服はでなくなっていた。

そこで、兄であるハリーに安くとも新品の洋服を買って与える。

当然そうすると、お下がりが一人分以上できることになった。

必然的に僕の洋服が増えるが、ぼろぼろには変わりない。

「まだ、起きないのかい？」

「もうすぐだよ」

「さあ、支度をおし。ベーコンの具合を見ておくれ。焦がしたら承知しないよ。今日はダドリーちゃんのお誕生日なんだから間違いないようにしなくちゃ」

僕は内心うんざりする。

わかってのことなのに、何度も何度も……。

そう思いながらベッドからおり、靴を履こうとするがベッドの下に入り込んでいた。

『クモさん。ベッドの下にある靴をとってください』

そう言つと、数十匹のクモがえっさこいさと靴を運んでくる。そんな光景は僕にとって日常の風景だった。

ここは階段下の物置。

クモだらけでも当たり前だ。

そして、僕はクモさんと友達だから、暇なときしゃべってくれるからこうして僕のお願いを聞いてくれるのだった。

兄さんの部屋だったらこんなことできないだろうな。

だって兄さんはダドリーのための1室を借りているから、きれいな部屋だろう。

こうして、廊下にてキッチンに向かった。

食卓はダドリーのプレゼントに埋もれてほとんど見えなかった。

ほしがっていたコンピューターもあるようだし、2台目のテレビやレース用の自転車もあり、兄さんからも小さいながらプレゼントがあった。

何故兄さんがダドリーなんかにはプレゼントをするのか不思議でたまらないが僕が考えても仕方がない。

あとで聞いてみよう。

そうそう、兄さんなんだが膝小僧が目立つような細い足で、細面の顔に真っ黒な髪、明るい緑色の目をしていて、まるっこい眼鏡をかけていた。

僕はといえば、髪の毛が深紅なことで、目が緑よりも透き通ったエメラルド色の目をしていて、他は総じて兄さんより細く小さい。

髪を真っ黒に染めて、眼鏡をかければ兄さんと見分けがつかなくなるだろう。

額の傷を除いては。

その傷のことをおばさんに聞いてみたことがある。

「お前の両親が交通事故で死んだときの傷だよ。質問は許さない」

とかわれてしまった。

質問は許さない——ダズリー家で平穩無事で暮らすための規則だ
ったりする。

ちょうどベーコンがいい感じに焼けた頃兄さんがやってくる。

「髪をとかしてこい」

朝の挨拶代わりにぶっきらぼつにおじさんが兄さんに言う。

「わかりました」

そいつってまた出て行く。

食卓にベーコンと玉子の皿を並べるが、プレゼントでほとんど隙間
のないので置くのは至難の技だった。

僕が難儀している間にプレゼントを数えていたダドリーが顔色を変
えておじさんとおばさんに言った。

「36だ。去年より1つ少ないや」

「坊や、今日お出かけしたときに2つ買ってあげましょう」

「そうすると、ぼく、30……30……」

「38よ、可愛い坊や」

「そうか、それならいいや」

僕なんて1つだよ。

毎年1つ。

兄さんからのプレゼント。

兄さんは僕よりも少し多い。

学校の友達から数個とおじさんたちから1つと、僕から1つ。
毎年いいなと思う。

ジリジリと突然鳴った電話は僕にとって幸運な知らせを運んできた。

動物園での出来事 前編

「バーノン、大変だわ。フィッグさんが脚を折っちゃって、この子を預かれないって」

おばさんは僕の方をあごでしゃくった。

ダドリーはショックで口をあぐり開けたが、僕の心は踊った。毎年誕生日になると、ダドリーと兄さんは友達と2人で、おじさんとおばさんに釣られ、お出かけすることになっている。

僕は、いつも置いてけぼりでふた筋向うに住んでいる変わり者のフィッグおばさんに預けられた。

まあ、フィッグおばさん自体は面白いし、猫ともはなせるから楽しいのだが、やはり置いてけぼりは嫌だ。

どうせおじさんは僕を家においていこうとは思わない。

僕が変わり者だから、変だから家が壊されるとでも思っているはずだ。

まあ、何度か壊しかけたことはあるが。

そういうことで、僕と一緒に連れて行ってくれる。

そして、なんと今日行く場所は動物園なのだ。

唐突だけど、僕は動物としゃべれる。

クモ、猫や鳥何とだってしゃべれた。

ただ、それをおばさんに見られたのが運のつきだった。

「今後一切動物と話してはいけません！」こう言われてしまったのだ。

この家で暮らすには守らなければいけない。

でも、おばさんに見られてないところなら問題なしだ。

だから、自室やフィッグおばさんの家、誰もいない道ばたで話している。

そんなわけで、動物園に行きたい。

「動物園まで連れて行ったらどうかしら……それで、車の中に残しておいたら……」

「しかし、新車だ。ジェレミーを1人で中に残しておくわけにはいかん……」

ダドリーは急に噓泣きを始めた。
顔を歪めてめそめそ泣けば何でも叶えてくれると思っているみたいだ。

「ダッドちゃん、ダドリーちゃん、泣かないで。ママがついてるわ。お前の特別な日をあいつなんか台無しにさせたりしやしないんだから!」

おばさんはダドリーを抱きしめた。

「ぼく……いやだ……あいつが……く、く、くるなんて! いつだつて、あいつが、めっちゃめっちゃにするんだ!」

しゃっくりをあげるふりをしながらわめいた。

けれど、その顔は僕にだけむかつて意地悪くにやりと笑う。

ちょうどそのとき玄関のベルが鳴り、みんなの来訪を伝える。

「ああ、なんてことでしょう。みんなが来てしまったわ!」

おばさんは大慌てだった。

そこからは流れで僕は生まれて初めて動物園に行くことになる。信じられないような幸運だった。

ひとりぼっちにされない。

とても幸せな気持ちに包まれた。

まあ、出発前におじさんに呼ばれて「言っておくがな……小僧、変なことをしてみる。ちよつとでもだ、そしたらクリスマスまでずっと物置に閉じ込めてやる」と言われてしまった。

いつもは兄さんの方がしてるんだけどね。

僕がかばっているから兄さんのしたことだって気付いてない。

それはともかく、僕もたまに変なことしちゃうから注意しとかなきゃ。

例えば、糸で何でも切れるとか、楽器を弾いたら衝撃波がでてしまったとか。

いまでも、こつそりと公園で練習してたりする。

演奏はストリートパフォーマンスとみられ受けが良い。

もちろんお下がりの帽子を使って顔は隠している。

糸の方は最初は使い方もわからなくて偶然だろうと思った。

でも、面白いなと糸で遊んでいるうちにブレスレットが突然光り、頭に使い方が流れ込んできたのだ。

驚いて尻餅をついてしまったが、立ち上がって感覚に従つてすると面白い使い方ができるようになったのだった。

それ以来こちらでも楽しくやっている。

あと、暇だったから名前も考えようとしたがこれまた刷り込まれた知識のように音使い、曲弦師と思いついたのだ。

それと、これは兄さんにも秘密にしている。

その兄さんほどおかしなことはしていない。

学校の屋根に瞬間移動したり、切った髪の毛が急に生えたり。
これのいいわけはとっっても見苦しかったけど。

動物園での出来事 後編

数十分後僕たちは動物園にいた。

たくさん動物たちと見られないように注意しながら話すとつても面白い。

僕の知らないことや、動物園に来る人のことをどう思ってるかなんて、動物にしかわからないことを教えてくれる。

ただ、ライオンとかはかわいそうだった。

言うことをきかなかつたら無知で何回もたたかれるそう。

さぞかし痛かっただろうにと、心配するとこれは仕方のないことなんだと言つて、『心配してくれてありがとう』とも言つた。

昼食のあとは、爬虫類館に行くことになる。

かなんにはひやつとして暗く、壁にそってガラスケースが並び、中には照明がついていた。

ガラスの向うには、いろいろなトカゲやヘビがいて、木材や石の上をするすると這い回っている。

ダドリーはすぐに館内の中で一番大きいヘビを見つけた。

さっきまで乗っていた車を2巻きにして碎いてくずかごに放り込み
そんな大蛇だったが、今はぐっすり眠っていた。

「動かしてよ」

ドドリーは父にせがむ。

おじさんはガラスをたたくが、ヘビは身じろぎもしない。

「もう一回やって」

ダドリーが命令するが結果は同じだった。

「つまんないや」

ダドリーはぶつぶつ言いながらどっか行ってしまった。

兄さんと僕はガラスの前にきて、じっとヘビを見つめた。

このヘビこそ退屈で死んでしまっても不思議はないのではないか。
1日中、ガラスをたたいてちよっかいを出すバカな人間以外に友達
もない。

物置で寝起きする僕の方が友達がいてました。

少なくとも、家を歩き回れるし、兄さんもいる。

突然、ヘビはビーズのような目を開け、ゆっくりと、とてもゆっくりとかま首をもたげ、僕たちの目線の高さまで持ち上げた。

ヘビがウィンクした……。

僕と兄さんは互いに顔を見合い、誰もいないかと周りを見回す。

大丈夫だ。

僕たちはヘビに視線を戻し、ウィンクを返す。

ヘビはおじさんとダドリーに首を向けて、こう言った。

『いつもこうや』
と。

『わかるよ』

と、兄さんは返す。

『そうみたいだね。他のみんなもそう言ってたからね』
と、僕は言う。

『本当にイライラするだろうね』

激しく頷くへび。

『ところで、どこからきたの？』

ガラスケースの横にある掲示板を器用に尾でツンツンとつつく。

『ブラジルからきたんだ』

僕がこう言うと、もう一度尾で掲示板をつつく。

そこには、『このへびは動物園で生まれました』と書かれていた。

『そうなの………じゃ、ブラジル行ったことないんだね』

兄さんが言うと、へびが頷く。

とたんに、僕らの後ろで耳をつんざくような大声がして、飛び上がりそうになる。

「ダドリー！ ダーズリーおじさん！ 早く来てへびを見て。信じられないようなことやってるよ」

ダドリーがどたどたとそれなりに全速力でやってくる。

「どけよ、オイ」

ダドリーが僕の肋骨にパンチを食らわせる。
不意を食らって僕は兄さんを巻き込みながらひっくり返った。

次の瞬間の出来事はあつという間だった。

ダドリーがガラスに寄りかかった。

次の瞬間、恐怖の叫びをあげて飛び退いた。

僕らは起き上がり息をのんだ。

ガラスケースが消え、さっきまで話していたヘビが外に出てきていたのだから。

館内にいた客は叫び声をあげ、出口へ向かって駆け出した。

ヘビが隣をと落ちすぎたとき、

『ブラジルへ、俺は行く——シュシュシュ、ありがとよ。アミーゴ』

こう言って通り過ぎていった。

兄さんがヘビとしゃべれたことに内心驚いていたが、兄さんは僕がヘビと、それ以外にもはなせたことを知りびっくりしているだろうと思った。

急いで家に帰ると、おじさんは兄さんに聞いた。

「ジェレミーはヘビと話してた。ハリー、そうだろ？」

「そうです」

兄さんもしかばっていたが疑いのまなざしは僕だけをむく。

ただ今回のことはショックだった。

いつも僕がかばっているが、自分から全て言い出していた。
兄さんから僕がかばうだろうと勝手に差し出されたのは初めてだった。

「行け——物置——出るな——食事抜き」

と、怒っているおじさんは言って、物置に何重もの鍵をかけられ閉じ込められた。

知らない人からの兄弟への手紙

今まで一番長いお仕置きを食らった僕が出て来れたのは夏休みにはいつてからのことだった。

この夏休みが終われば兄さんとは別の学校になる。

兄さんはダドリーと同じ名門校に行く。

なぜならおかしくないからだ。

そして、親戚の子供1人まともに育てれないのかという周りの目を気にしてということもあるからだった。

そんなわけで僕は。1人で公立の学校に通わなければならない。

ちょうどこの日は制服を買う日で、ペチュニアおばさんにつれられて2人はロンドンに。

僕はフィッグおばさんの所でいつも通り過ごしていた。

そして夜になり、ダドリーはピカピカの新しい制服を着て居間を行進している。

その姿におじさんとおばさんは、人生でもっともズバらしい瞬間だとか、こんなに大きくなって、こんなにハンサムな子が私のちっちゃなダドリー坊やだなんて、信じられないなどと言っていた。

僕はといえば、翌日見た、洗い場におかれた大きなたらいの中の灰色の液体に染められたダドリーのお下がりの制服が僕のだそうだった。きっと似合わないだろうと思いがちながらも、何も言わずに受け取った。

兄さんと比べれば天と地をほどの差だ。

僕と兄さんの関係は端から見れば良好だろう。けれど実際はねたましいと思っただりする。

お仕置きを僕が受けるのも表面上は仲良くしておかないとダーズリ―夫妻にまた何か言われるかもしれないからだった。

逆に兄さんは蔑みの視線をたまに向けてくる。

ダドリーのイジメ集団には入っていないものの、命令に仕方なく従って殴ってきたりすることもあった。

たぶんだが、動物園のガラスを消したのは、僕に巻き込まれて押し倒されたことに怒ってやったことだと考える。

だから、お仕置きに僕を差し出したんだろう。

まあ、他にもまともだと思われていたのにまともじゃないと思われるのが嫌だったんだ。

僕みたいな惨めな暮らしは誰だってしたくないからね。

そんな僕らが運命の手紙を受け取るのは朝だった。

ダーズリ―家にとっては最悪の朝になりそうだが。

「ダドリーや。郵便をとっておいで」

と読んでいた新聞の影からおじさんが言う。

「ジェレミーにとらせろよ」

「ジェレミーとってこい」

僕は何一つ文句を言うことなく郵便をとりに行く。

ここで何か言ったとしても僕の言うことなど無視されるからに決まっている。

ならば、言わない方が懸命といえよう。

マットの上には4通落ちていた。

マージおばさんからの絵はがき、請求書らしき茶封筒。それに……僕と兄さん当ての手紙が1つつつ。

僕は手紙を拾い上げてまじまじ見た。

いままただの一度も受け取ったことのなかった手紙に心臓は高鳴った。

『サレー州 リトル・ウインジング プリベット通り4番地 階段下の物置内 ジェレミー・ポッター様』
『サレー州 リトル・ウインジング プリベット通り4番地 一番小さい寝室 ハリー・ポッター様』

何やら分厚い、思い、黄色みのかかった費用師の封筒には行っており、宛名はエメラルド色のインクで書かれていて、切手は貼られていない。

震える手で封筒を裏返してみると、紋章入りの紫野楼で封印がしてあった。

真ん中に“H”と書かれ、その周りをライオン、鷲、穴熊、ヘビが取り囲んでいる。

「小僧、早くせんか！」

キッチンからのおじさんの怒鳴り声であわてて居間に戻る。

いそいで、2通を渡し自分のを読もうとする。

「パパ！ ねえ！ ジェレミーが何か持ってるよ」

ダドリーが突然叫ぶ。

そうすると、おじさんがそれをひったくった。

「それ、僕と兄さんのだよ！」

僕は奪い返そうとした。

「お前に手紙なんぞ書く奴がいるか？」

とおじさんはせせら笑い、片手でぱらっと手紙を開いてちらりと目をやった。

とたんに、赤から青、白っぽい灰色へと顔を変えた。

「ペ、ペ、ペニチュア！」

おじさんはあえぎながら言う。

ダドリーと兄さんが奪って読もうとするが、おじさんの手の中の手紙は届かないように高々と掲げていた。

おばさんは手紙を見るなり、

「バーノン、どうしましょう……あなた！」

と窒息しそうな声を上げた。

それから、おじさんとおばさんは僕たちを自分たちの部屋へ追いや
りヒソヒソ話を始めたようだった。

止まない手紙

結局おじさんたちは僕たちに手紙を見せず、無視することに決め込んだようだった。

ただ、僕たちにも絶対受け取ってもみるなときつく言われた。それは、ダドリーに対しても同じだった。

けれど、時間が経つにつれ誰からの手紙か、何の手紙か気になって仕方がなくなる。

それは、兄さんも同じようだった。

手紙を受け取った翌日、13通もの手紙が届く。

郵便受けに入らないので、ドアの下から押し込まれたり、横の隙間から差し込まれたりしたのも数通あった。

おじさんに渡す前に宛名をみたが、兄さん宛がほとんどで僕のは1通しかなく少しがっかりだ。

まあ、その手紙は全部焼き捨てられたが。

その次の日、もう手が付けられないほどの手紙が届いた。

牛乳配達が持ってきた、卵の2ダースにも、小さく丸められた手紙が1個1個に隠されてあったのだ。

それを受け取ったおばさんは怒りのあまりミキサーにすべてをかけた。

「お前なんかこんなにメチャメチャ話したがっているのはいったい誰なんだ？」

ダドリーもこの惨状には驚きハリーに聞いた。

そして今日も、僕宛の手紙は1通だけだった……。

また次の日は日曜日だった。

「日曜は郵便は休みだ」

おじさんは疲れたやや青い顔で、しかし嬉しそうに座っていた。

「今日はいまいましい手紙なんぞ——」

そう言い終わらないうちに、キッチン煙突を伝ってヒューツと落ちてきて後頭部にぶつかった。

次の瞬間30枚、40枚もの手紙が暖炉から雨あられのように降ってくる。

おじさんはそれをとっさにかわしたが、僕と兄さんはこれはチャンスと手紙を捕まえようとしたが、寸での所で邪魔されてつかむことはできなかった。

このあと、おじさんは気がおかしくなったかのように手紙を引きちぎっていたが、僕にはその手紙をどうにか見るすべはない。

そして、「荷物をまとめろ」といわれ、どこかに避難するんだなと思った。

避難先は陰気くさいホテルだ。

今日もまた1通だけしか僕宛の手紙はない。

朝起きてみると、おじさんがホテルの従業員から大量の手紙をもらっていた。

ここに来て手紙から逃げることは無理だったようだ。

かなり不健康そうなおじさんとおばさんな顔をした2人は味気ない朝食に何文句を言わず、ただ次に逃げる先を考えているようだ。

ダドリーはかなり不満そうだったが、「うるさい」のおじさんの一言に渋々したがっている。

そして、ホテルからチェックアウトすると食料を買い込みにスーパーによったあと、船着き場まで来た。

「申し分無い場所を見つけたぞ。来るんだ。みんな降りろ！」

そう言うとおじさんが指差すのは海の中にぽつんと立つ、途方もなくみすばらしい小屋だった。

「今夜は嵐が来るぞ！ このご親切な方が、船を貸してくださることになった」

上機嫌そうに言うおじさん。

「食料は手に入れた。一同、乗船！」

凍えるような寒さの中、船に乗りやつのことでついた小屋はひどかった。

海藻の匂いがつんと鼻を刺し、板壁の隙間からヒューヒューと風が吹き込んでいる。

そんな中でも、おじさんはこんな所まで手紙を届けにくるものはいないと思ったのかとつても上機嫌だった。

僕にとっては、とても不満だったが。

「ジェレミー、明日が誕生日だって覚えてるかい？」

兄さんが唐突に声をかけてくる。

けれど、考えてみれば今日が誕生日だった。

最近の手紙のことで頭がいっぱいで忘れていたようだ。

「そうだね、兄さん」

毎年、僕たちは2人で誕生日を祝っている。

ただ今年は、兄さんにも僕のもプレゼントがないことだけがいつもと違った。

それも、この状況では仕方のないことかもしれないが。

30秒……20……10……9……声を潜めて2人でカウントする。

……3……2……1……

ドン

僕らの誕生日は爆音とともに震える小屋の中で迎えることになったのだ……。

鍵の番人 前編

ドーン

もう一度爆音とともに戸が揺れる。
誰かがノックしているようだ。

ダドリーが跳び起きてて寝ぼけた声を上げる。

「何？ 大砲？ どこ？」

向うの部屋でガラガラガツシャンと音がしたかと思うと、おじさんが細長い筒——ライフル銃を持って戸の前に立った。

「誰だ。そこにいるのは。言っとくが、こっちには銃があるぞ！」

おじさんが叫んだ。

……………。

一瞬の空白があり、そして……バターン！

蝶番が吹っ飛ぶほどの力で、扉が轟音をあげて床に落ちた。

そして戸口には大男が立っていた。

ボウボウの長い髪とモジャモジャの荒々しいひげに隠れて顔はあまり見えないが、その間から黄金虫のような目がキラキラ輝いている。

大男は窮屈そうに部屋に入ってきた。

身を屈め先ほど壊した扉をいとも容易くはめ直し、

「お茶を入れてくれんかね？ いやはや、ここまでくるのは骨だったぞ」

こう言った。

大股でソファに近づき、そこにいたダドリーに向かって、

「少し空けてくれや、太っちょ」

と言う。また、

「オーツ、ハリーだ！ それにジェレミーだ！」

と言った。

兄さんの知り合い？

今までみてきたがこんな大男はまともじゃない。

ドアは壊してくるし、嵐の中こんな建物にも来ている。

そんなのが知り合いにいるのか？

横目で兄さんをみてみると、おびえており、目は「誰？」と語っていた。

「最後にお前さんをミいた時にや、まだほんの赤ん坊だったな。ハリーは父さんそっくりだ。でも目は母さんの目だな。ジェレミーは母さんにだ。髪も紅いし、目も綺麗な緑だな」

僕たちの両親のことを知っている！？
何者だ？

「いますぐお引き取り願いたい。家宅侵入罪ですぞ！」

「黙れ、ダーズリー！腐った大すももめ」

「というやいなや、おじさんの手から銃をひったくりグニヤリとまげてしまったのだ。」

「何はともあれ、ハリーや誕生日おめでとう。お前さんにはちよいとあげたいもんがある……どっかで俺が尻に敷いちまったかもしれないが、まあ味は変わらんだろう。ジェレミーすまん、お前さんのこと忘れてても用意できかった」

「べ、べつに、か、か、かまいません」

恐怖でろれつが回らない。

「ありが……あなたは誰？」

兄さんは、お礼より先に疑問が出てしまったようだ。

「そうだ、まだ自己紹介をしとらんかったな。俺はルビウス・ハグリッド。ホグワーツの鍵と森を守る番人だ」

男は巨大な手を差し出し、兄さんの腕をぶんぶん振って握手した。

僕は？

なぜかこの大男は僕のことを無視する——見えてないようだった。

「さあて、お茶に使用じゃないか。え？」

そう言つて、暖炉の方に目をやり火がついてないのをみると、それに覆いかぶさりもぞもぞと何かをして、はなれた瞬間には炎がめらめらとたゆたつていた。

不思議な様子に驚いたが、兄さんは勇敢にも質問をしていた。

「あの、僕、まだあなたが誰だかわからないんですけど」

「ハグリッドって呼んでおくれ。みんなそう呼ぶんだ。さっき言つたようにホグワーツの番人だ——ホグワーツのことはもちろん知つてらうな？」

「あの……、いいえ」

ハグリッドがショックを受けたような顔になると兄さんは「ごめんなさい」と謝る。

「ごめんなさいだと？ ごめんなさいはこいつらのセリフだ。お前さんが手紙を受けとつちよらんのは知つとつたが、まさかホグワーツのことまで知らんとは、思つてもみんかつたぞ。なんてこつた！ お前の両親がいつたいどこでいろんなことを学んできたか不思議に思わんかつたのか？」

「「いろんなことつて？」」

兄さんと僕の声は重なり尋ねた。
ハグリッドの言うことは僕にとって新事実ばかりで信じられなかった。

ただ、父さんと母さんのことはいつさいしゃべらないところからおじさんとおばさんは怪しかったし、何かしら不都合があっただとすれば納得もいった。

「いろんなことつて、だと？　ちよつと待った！　この子が……このこともあるうものがシランというのか……弟のジェレミーならまだしも……全く何にも？」

「僕少しなら知ってるよ。算数とかそんなのだったら」

話しかかみ合っていないようだった。

このハグリッドが言うのは何かしら別のことだろう。
たぶん、おかしいなこと。

「我々の世界なことだよ。つまり、あんたの世界だ。俺の世界だ。あんたの両親の世界のことだ」

「なんの世界？」

「ダーズリー！」

ドッカーンという効果音が似合うような声と形相でおじさんを睨む。そのおじさんはいくと、顔を青ざめさせ、「むにやむにや」と要領の得ないことを言うばかりだった。

「じゃが、お前さんの父さんと母さんのことは知つとるだろうな。ご両親は有名なんだ。お前さんも有名なんだよ。ジェレミー、お前さんはちと別だが」

僕は兄さんみたいに有名ではないようだ。

いわゆる、ハグリッドの世界のどこにでもいる子供のようだった。

「えっ？ 僕の……父さんと母さんが有名だったなんて、ほんとに？」

「知らんのか……お前は自分が何者か知らんのだな？」

「やめろ！ 客人。 いますぐ止めろ！ その子た「きさま！」ヒッ」

「貴様は何も話してやらなかったんだな？ ダンブルドアがこののために残した手紙の中身を一度も？ 俺はあの場にいたんだ。ダンブルドアがおいたのをみてたんだぞ！ それなのにきさまは、ずっとこの子たちに隠してたんだな？」

「いったい何を隠してたの？」

「止めろ！ 絶対に言っな！」

おじさんは狂ったように叫び、兄さんは好奇心に満ちあふれた顔をしていた。

僕はといえば、ただこの話を冷静に聞いていた。突拍子もないことをただ信じるわけにはいかない。

でも、この場のおじさんたちはあからさまにおかしくなっている。ということとは、大なり小なり信じる価値はある。

「ハリー、ジェレミー——お前たちは魔法使いだ」

「魔法使い！？」

「ああ。しかも訓練さえ受けりゃ、そんじょそこらの魔法使いよりすごくなる。なんせ、ああいう父さんと母さんの子だ。お前さんたちは魔法使いに決まっている。そうじゃないか？ さて、手紙を読むときに来たようだ」

それは、先日から届いていた手紙と宛名以外は全く同じものだった……。

鍵の番人 後編

『海の上 岩上の小屋、床 ハリー・ポッター様』

『海の上 岩上の小屋、床 ジェレミー・ポッター様』

僕は手紙を取り出し、読んだ。

要約するとこんなことが書いてあった。

ホグワーツ魔術学校への入学が許可され、そのための必要なもののリストがあるということだった。

また、校長がアルバス・ダンブルドアsで、たくさんの肩書きを持つておりすごいということと、副校長がミネルバ・マクゴナガルということだ。

そして7月31日必着で返信がいるということだった。

ただ、フクロウ便というのは理解しがたい。

けれど、つい最近の手紙の嵐のときフクロウがなぜか家の周りにいたから納得がいった。

思考にふけていると兄さんは色々ハグリッドに聞いてみたいだ。

「ハリー、ジェレミーは行かんせんぞ」

「お前のようなコチコチのマグルに、この子を引き止められるもんなら拝見しようじゃないか」

と、おじさんに向かって言うハグリッド。

マグルって？

「マグル——なんて言ったの？」

と、兄さん。

「マグルだよ。連中のように魔法族ではないものをわしらはそう呼ぶ。よりによつて、俺のみた中でも最悪の、極めつきの大マグルの家で育てられるなんて、お前さんたちも不運だなあ」

「ハリーたち2人を引き取ったとき、くだらんごちゃごちゃはおしまいにするつもりは誓った。このこの中からそんなものはたたき出してやると誓ったんだ。そのために、ハリーにはダドリーと遜色無い生活をさせてきたんだ！ 魔法使いなんて、まったく！」

おじさんとおばさんは知ってたようだ。

それに、兄さんだけ鼻肩してたのか。

何で僕たち2人一緒にしてくれなかったんだ？

「知ってたの？ おじさん、僕がああ、ま、魔法使いだったこと、知ってたの？」

「知ってたかですって？ ああ、知ってたわ。知ってましたとも！ あのしゃくな妹がそうだったんだから。お前だってそうに決まっている。それに妹に良く似ているジェレミーなんて絶対そうだと確信を持ってましたとも。妹は、休みで帰ってくるときにや、コップをネズミに変えちまうし。父も母も、やれリリー、それリリーって我が家に魔女がいるのがあるのが自慢だったみたいだったけど、私は気付いてたんだよ…… 奇人だった」

おばさんは妹がうらやましかったんだ。
褒められるのは妹ばかり。

まともな人間が特別な人間に勝てるわけない。
だから、あんなにも特別な^{おかし}ことがきらいだったんだ。

「妹は自業自得で吹っ飛んでしまった。おかげで私たちはお前たちを押し付けられたってわけさ！　そして、手紙にはハリーはかなり特別だって書いてあったから仕方なくいい生活をさせてやったんだよ」

兄さんは特別だったんだ。

だから、まともにしようと、あんなに必死でダドリーと同じようにさせてたんだ。

ただのおかしな僕、母さん似の僕はおばさんからみれば、みるだけで悪意が湧く存在だろう。

それでも、今まで生活させてもらえたのは殺すや捨てるといったまともじゃないことができなかったからだ。

「吹っ飛んだ！？　自動車事故じゃないの！」

と、兄さんは聞く。

「自動車事故！　自動車事故何ぞで、リリーやジェームズが死ぬわけがないだろう。何たる屈辱！　何たる恥！　魔法界の子供は1人残らずハリーの名前を知ってるというのに、ハリー・ポッターが自分のことを知らんとは！」

と、怒るのようになり声でハグリッドが言う。

「でも、どうしてなの？　いったい何があったの？」

それから、ハグリッドは語った。

『例のあの人』と呼ばれるヴォルデモートが、母さんと父さんを襲ったこと。

そこで、兄さんを殺そうとして消失したこと。

そのとき、兄さんの稲妻形の傷ができたこと。

その傷は強力な悪の鈍いにかけられた傷だということ。

だから、兄さんが『例のあの人』を倒したことで、魔法界では英雄となっていること。

そして僕は、たまたま先に兄さんが狙われて『例のあの人』が撃退されたから生きているということ。

ただ幸運だと言うこと。

だから、兄さんとは逆に知っている人はほとんどいないということだった。

最後に、兄さんと僕は魔法使いだという根拠を言われた。

「行きたいか？ お前たちが行きたいというなら、お前のようなコチコチのマグルに止められるものか」

「僕は行きたい」

「僕も兄さんと同じで行きたい」

「ふざける「そうか。なら明日は街へ言って、教科書やら何やら買わんとな！」」

ハグリッドはおじさんの言葉を遮り僕たちに言った。

僕はこれで自由になれる！

ダイアゴン横町に行く

翌朝、目が覚めてみると昨日のあらしに比べればとても穏やかだった。

ハグリッドという大男は来なくて、兄さんと誕生日を祝ってすぐに寝たのかというくらい静かだ。

けれど、夢じゃないことはわかっている。

僕はやっと、まともな生活が——兄さん並みの生活ができる。

物置もべつに悪い所じゃない。

クモさんのおしゃべりも楽しいし、どこにでも手が届く狭さは良かった。

でも、やっぱり、兄さんがうらやましかった。

おじさんたちにあまり制限されず、自由に振る舞える。

僕は、あれこれ言われほとんど何もできない。

僕には兄さんしか親しみをもてる人はいなかったけど、兄さんは友達もいたし、おじさんたちも少しは優しくかったからそれなりだっただろう。

部屋でも、心でもほとんど1人きり。

でも今日は違う。

僕も、兄さんみたいに友達を作れる。

ダドリーにも邪魔されない。

何にも邪魔されない。

自由なんだ。

だから、この歓喜を感じていた身体は脳は夢なんて勘違いはしない。

「おはよう」

兄さんが起きてきた。

「おはよう」と、兄さんも返してくる。

その兄さんの後ろをハグリッドが歩いてくる。

「ハグリッドもおはよう」

「おはよう、ジェミニー。着替えはすましてあるか？ 出かけるぞ。今日は忙しいからな。ロンドンまで言ってお前さんたちの入学用品を揃えんな」

「あのね……ハグリッド」

「ん？」

「僕たちお金無いんだ……それに、昨日おじさんから聞いたでしよ。僕たちが模倣の勉強しにいくのにはお金は出さないって」

と、兄さんが言う。

「そんなこと心配はいらん。父さんと母さんがお前さんたちに何にも残していなかったと思うのか？」

「でも、家が壊されて……」

「まさか！家の中に金なんぞおいておくものか。さあ、まずは魔法使いの銀行、ゴングリッツへ行くぞ」

「魔法使いの世界には銀行まであるの？」

「1つしかないがね。グリ ngo ツだ。小鬼が経営しとる」

「こ・お・に・？」

「そうだ。だから、銀行強盗なんて狂気の沙汰だ、本当に。小鬼ともめ事を起こすべからずだよ。何かを安全に閉まっておくには、グリ ngo ツが世界一安全な場所だ。たぶんホグワーツ以外ではな。実はダンブルドアに頼まれて、ホグワーツの仕事がある」

ハグリッドは誇らしげにハリーに語った。

僕はといえば、小鬼さんと友達になれたらいいなって思った。どんな姿かとも興味がある。

それにどんなことをいつも考えてるんだろうな。

それにしても、父さんと母さんは僕らにお金を残したんだろうか？それとも、兄さんに？

まあ、行ってみればわかるか。

「忘れ物はないかな。そんじゃ、出かけるとするか」

嵐がやんだ海はとても穏やかで、ハグリッドが魔法で動かしたボートに揺られて目的地へと向かった。

その間に、魔法省とか、ゴングリッツにはドラゴンがいて、入っても迷って出れないとか、コーネリウス・ファッジ大臣の話とか、

ハグリッドがドラゴンが子供のころから欲しいとか、何かいっぱい聞いた。

それと、2枚目の紙のリストを確認した。

何かどれも今までじゃ考えられないようなものばかりだ。

ローブしかり、三角帽しかり。

これから行く所で買えるんだろうけれど、ロンドンで買えるのか？

「どこで買つか知ってればな」

同じ疑問を思った兄さんが聞いていた。

その、どこが問題なんだけどね。

これも、ついていけばわかるからいつか。

そして、現在『漏れ鍋』と書かれた看板の薄汚れたパプの前に立っている。

ここが？

そう思っているうちにハグリッドは中に入っていつてしまった。

慌てて兄さん僕の順番で入っていく。

「大将、いつものやつかい？」

とバーテンが聞く。

「トム、だめなんだ。ホグワーツの仕事中でね」

ハグリッドが大きな手で兄さんの方をパンパン叩きながらそう言った。

「なんと。こちらが……いやこの方が……」

漏れ鍋は急に水を打ったように静かになる。

兄さんは本当に知らない人はいないんだ。

僕は……………。

「やれ嬉や！ ハリー・ポッター……何たる光栄……」

バーテンはカウンタから出てきて兄さんに駆け寄り涙を浮かべながら手を握った。

「お帰りなさい。ポッターさん。本当によこそお帰りです」

これをきっかけに兄さんの周りにはパブにいたほとんどの人がそばに寄って「お帰りなさい」と言っていた。

僕といえば、少し離れてみていることしかできない。

「クイレル教授！ スネイプ教授！？」

ハグリッドがちょうどハリーの周りが少し落ち着いた頃に言った。

「クイレル先生とスネイプ先生はホグワーツの先生だよ」

「ポ、ポ、ポッター君。お会いできて、ど、どんなにう、うれしいか」

「クイレル先生、どんな魔法を教えてらっしゃるんですか」

「や、や、闇の魔術に対するぼ、防衛です」

教授はまるでそのことを考えたくないともいうように言うのだった。

そして、吸血鬼の本がどうたらといってさっさと出て行ってしまふ。何か兄さんに近づきたくなさそうだったな。

「ジェレミー・ポッター。吾輩はセブルス・スネイプ、魔法薬学を教えている。ハグリッド、吾輩はこっちを連れて行く。ハリー・ポッターとはお前がいけ」

「そうかい。ジェレミー、ここでいったん別れだ。ハリーのことは任せな」

「そういうことだ、行くぞ」

「ちょ、ちょっとどういうことですか!？」

「いいから来い」

僕はいきなりスネイプ先生に拉致られてしまった。なんでこの人は兄さんじゃなくて僕に自己紹介を？それに、この先生が僕を案内してくれるの？

ハグリッドと兄さんと一緒に買い物は結構楽しみだったんだけど、この人は悪い人じゃなさそうだし、いや、良い人だと思う。

それに、僕をしっかりとみてくれた初めての人になるのかな。
だからついて行こう。

こうして僕は兄さんたちより先に魔法世界に踏み込むこととなった。

グリーンゴッツ銀行

「いきなり手を取って連れてくるなんて強引ですね、スネイプ先生」

「仕方がなかるう。あの空気はきついのだ。お前も同じであろう？」

「そりゃ、そうだけど……。でも、なんでここからはスネイプ先生が連れて行ってくれるの？」

「お前の分の銀行の鍵を持っているのが吾輩だからだ。リリー、お前の母さんから預かっていたのだよ」

「お母さんを知ってるの？」

「ああ、知っている。知っているとも。お前はとてもリリーに似ている。目の色も髪の色も本当に似ている」

「そっか……」

スネイプ先生はどうやら母さんの知り合いみたいだ。

いや、知り合いというよりもっと近い関係みたいだった。

ハグリッドが安全だというグリーンゴッツの鍵を預けていることからわかる。

「右にあるのが鍋屋だ。そのフクロウのなく声が聞こえる店は、イロープのフクロウ百貨店だ」

と、色々説明されながら歩く。

「スネイプ先生、学校ではどんな魔法を習うの？」

「1年生はたいした数の魔法はしないが——難しいのは変身術だ」

「そうなんだ。先生は得意なのとかあるの？」

「闇の魔術に対する防衛術は得意だな」

「そうなんだ。魔法薬学は？」

「作り方さえ間違えなければうまくできる。ただ、教科書通りではうまくいきにくいときもあるが」

「珍しい薬とかないの？」

「フェリックス・フェリシス は珍しい。通称幸運の液体と呼ばれている」

「それって飲んだら幸運になるの？」

「そうだ。まあ、簡単には作れないし、そう手に入るものでもないから飲むことは1回あればいいくらいだ」

「そんなことないよ。しっかりと勉強して作れるようになる！ できたら、先生にもあげるから」

「それなら授業についてこい。吾輩は厳しいからな」

「うん！」

「ここがグリーンゴッツだ」

ちょうど質問が一区切りした所で、銀行についた。小さな店の建ち並ぶ中、ひととき高くそびえる真っ白な建物だった。磨き上げられてブロンズの観音開きの両脇に、深紅と金色の制服を来て立っているのは……

「さよう、あれが小鬼だ」

先生が小さな声で教えてくれる。

僕より頭1つ分くらい小さい小鬼は賢そうな顔つきに、尖ったあごひげ、それに手の指と足先が長い。

中に入っていくと、百人を超える小鬼が細長いカウンターの向こう側で、脚高の丸椅子に座り大きな帳簿を書いたり、心中のはかりでコインの重さを量ったり、片眼鏡で宝石を吟味していたりする。

みんな忙しそうだな。

友達になってくれる人いるかな？

友達に2号になっちゃうけど大丈夫かな？

1号はスネイプ先生だよ。

ハグリッドは……兄さんばかりみてたから微妙かな。

「ジェレミー・ポッターの金庫と吾輩の金庫まで行きたい。案内を頼む」

「鍵はお持ちでいらっしゃいますか？」

「ああ」

そういつて、ポケットからふたつの鍵を取り出し小鬼に渡した。

「グリップフック！ この方達の案内を頼む」

グリップフックと呼ばれた小鬼がこちらにやってくる。

「こんにちは。これからよろしくね」

「はい。では、こちらに」

そう言つて案内された先は石造りの通路だった。

グリップフックが口笛を吹くと、小さなトロツコが元気よくこちらに向かつてくる。

それに乗り込み、くねくねと曲がる迷路のような道をドンドン進んでいく。

ついには鍾乳洞の中に入り、少し寒いかなと感じたとき、

「寒くはないか？」と、先生が聞く。

「大丈夫です、先生」と返す。

我慢で着ない寒さでもない。

冬の登校はもつと寒かった。

やがてトロツコが止まり、

「つきました」

と、グリップフックが言う。

とても分厚そうな扉に鍵を差し込み、ガチャリと開ける。

緑色の煙がもくもくと吹き出してくる。
それが消えると僕はあつと息をのんだ。

中にはバッグが1つ。

「これはお前のものだ。まあ、お前の兄に比べれば少なすぎるかもしれないがな。それでもお前のだ」

「バッグ1つ？」

これだけ？

「このバッグはリリーがいつも使ってたものだ。中には空間拡張魔法がかけられている。何から何までその中に入っているはずだ」

良かった。

これだけだったらびつくりだよ。

バッグの中を見るとたくさんのお金と、魔道具が入っていた。

でも、兄さんはもつと貰ってる……。

なんで？

母さんたちはなんで僕に兄さんと同じ量をくれないの？

やっぱり兄さんの方が……………」おい！」

「ひゃい！」

考えていたらぼーっとしてたみたいだ。
いきなり声をかけられたから驚いて噤んでしまった。

「もう見つけたか？ このバッグの中にはお前への手紙が入っている。リリーからのだ」

「母さんからの手紙？」

「そうだ」

「手紙を僕に読ませるのが仕事だ」と、付け加える。

僕は手を奥まで入れ手紙をつかみ取った……………。

お母さんからの手紙

『ジェレミーへ』

あなたがこれを読んでいるとき私たちは死んでいるでしょう。

ごめんなさいね。あなたの大きくなった姿、見たかったわ。

まずはあなたの名前について話しましょう。

ジェレミーって言うのはね、神に選ばれし者をさすのよ。

そして、あなたは本当に神に選ばれてるの。

あなたを身ごもったことがわかった日、信じられないことに夢に神が出てきたの。

そして私に言ったわ、「あなたが産む子であとに産まれてくる方は神の祝福を受けています。あなたの大切にしているブレスレット2つと、ペンダント1つに私が力を込めます。それを、その子につけてあげなさい」と。

こんな話を聞いてお母さんがおかしくなったんじゃないかって思った？

最初、私もそうだったと思ったわ。疲れてたからこんな夢を見たんだって。

でもね、朝起きてみると1冊の本があったの。

見たこともない本でね、探知の魔法をかけてみたわ。

そのときの押し寄せる情報の波は今まで感じたこともなく綺麗で、重くて、多かった。そして、そのすべてがあなたに語りかけているようだったわ。

だから、確信せざるをえなかった。昨日の夢に出てきた神様は本物だと。

あなたは優秀な魔法使いになれる。

でも逆に、魔法使いの天敵ともなりえるの。

神のあなたに与えた力はそう言うものだったわ。

詳しくは金庫と一緒にいてあるバッグの中の本を見なさい。

それが、神からの贈り物だから。

私はあなたに「好きに生きなさい」とだけしか言えないわ。

あと、ごめんね。ハリーより少ない金庫で……。

バッグ1つだけが入ってるなんて驚いたわよね。

だけど本の入っているバッグだって魔法で空間拡張がしてあったのわかった？

その中にはね、かなりのものが入るし、入れてるわ。

ホグワーツの私の知っている限りを書いた本も入れてある。

だから、頑張って生きなさい。

あなたのお母さん、リリーより

P・S・セブルス、ジェレミーのことは任せるわよ。」

ありがとう、お母さん。

僕のこと心配してくれて。

僕のこと大切に思ってくれて。

こんなにも思いの詰まったものを貰ったのに、文句なんて言わないよ。

お母さんがどこでも自慢できる息子になってみせるから。

この名前に恥じないくらいすごい人になるから。

だから、安心して眠ってね。

「先生、『P・S・セブルス、ジェレミーのことは任せるわよ。』とお母さんが手紙に」

「わかってることを……」

吐き捨てるように言いながらも、優しそうな表情を浮かべる先生はとても嬉しそうだ。

金庫にある魔道具で必要そうなのを先生に見繕ってもらいバッグにいれ、お金も必要な分だけを教えてもらう。

そして、ありがとうと小さくつぶやきながら金庫をあとする。

次にトロツコが向かったのは先生の金庫だ。

僕のと看とは違い慣れた動作で素早く何かをとってきた。

「ジェレミー、私からの誕生日プレゼントだ。10年分は私のホグワーツ時代に使っていた教科書と魔法薬学などの集めた蔵書だ。今年の分は上に戻ってから渡そう」

「ありがとうございます！」

僕のバッグにいれてくれる。

スネイプ先生は優しい人だ。

兄さんを除いて僕に誕生日プレゼントをくれた唯一の人だよ！
頑張つて勉強して、スネイプ先生の期待に答えなきゃ！

それに、今年の分は何をくれるんだろう？

とっても楽しみだよ。

お母さん。

僕を愛してくれて本当にありがとう。

杖選び

地上に上がると光がとても眩しい。

「フリッグフック、案内してくれてありがとう。良かったら友達になつてくれないかな？」

「はい。あなたを見ているととても懐かしい気がします。こちらこそよろしく願います」

握手をして別れる。

とってもいい人だった。

小鬼って怖いもんでもないんだな。

友達になれて本当に良かった。

「小鬼が人間に対してあれほど友好的になるとは——さあ、行くぞ。買わないといけないものはたくさんあるからな」

「はい」

「君はマダムマルキンの洋装店で制服を買ってこい。私は鍋など買ってくる」

先生はそう言つてすたすたと買いにいつてしまった。

僕は先生に言われた店に行く。

マルキンさんは藤色ずくめの服を着た、愛想のよい、ずんぐりした魔女だった。

「坊ちゃん。ホグワーツなの？ 全部ここでそろいますよ」

「ありがとうございます」

僕はもう1人いた魔女さんに、踏台の上に立たせ、頭から長いロブを着せかけ、丈を合わせピンで留め始める。

それから少しばかりたち、終わる頃に僕と同じくらいの子が入ってきた。

「君もホグワーツかい？」

「そうだよ」

「僕の父は隣で教科書がかつてるし、母はどこかその先で杖を見ている」

「そうだな。僕も、スネイプ先生が鍋とかを買ってるよ」

「先生？」

「そうだよ。スネイプ先生。魔法薬学の先生なんだって。ここのとを知らない僕を案内してくれてるんだ」

「へー。スネイプ先生が……。君はクイディッチをするのかい？」

「クディッチ？」

「そうか……。知らないんだ。マグルかい？」

「違うよ。お父さんお母さんもホグワーツに通ってたって聞いたよ。僕はただマグルに育てられてたっただけ」

「災難だったね。そしたら、両親は……」

「死んじゃってるよ」

「そっか——」

「じゃあ、僕は行くね。ちょうど先生がこっちに向かっているのが見えただけ。また今度ホグワーツでね」

「そうだな。僕の名前はドラコ・マルフォイ。君は？」

「ジェレミー・ポッター」

「同じ年の魔法使いの子に初めてあった。あのことも友達になれるといいな。」

「行くぞ、ジェレミー」

「先生が洋服店から出てきたのを見て声をかけてくる。」

「はい！」

「次は杖だな。杖は——オリバンダーの所だな。リリーの才能を持っているお前には最高の杖じゃなければだめだろう」

「僕は頷く。」

先生に才能があるって言われた。
褒められると嬉しいな。

それに母さんってやつばすごい魔女だったんだ。
ホグワーツの先生からこんな言葉を言わせるんだもん。

「さっきのお店で僕と同じくらいの子でマルフォイって子にあったんだ。その子が言ってたんだけど、クイディッチって何か？」

「魔法族のスポーツだ。箒に乗ってボールをリングに入れるのだ。細かいルールは結構あるが金のスニッチといわれるものをとったら試合終了で、得点を競う。国ごとにチームがあったりする」

「面白そうだなー。ホグワーツでもあるの？」

「ある。寮で対抗戦をしている」

「寮？」

「スリザリン、レイブンクロー、ハッフルパフ、グリフィンドールの4つがある。入学当日に組み分けをする」

「先生はどの寮だったの？」

「スリザリンだ。お前の母さんはグリフィンドールだった」

「僕はどこの寮になるかな？」

「是非スリザリンに入って欲しいものだが、母さんと同じところがないのならそれはそれでいいのではないか？　ちなみに私はスリザリ

ンの寮監だ」

「うん。入学までに頑張つて考えとく。お母さんのホグワーツについて書いた本を読んでみるよ」

「そうか——ついたぞ」

目の前には、はがれかかった金色の文字で、扉に『オリバンダーの店——紀元前382年創業 高級杖メーカー』と書かれてある。ほこりっぽいショーウィンドウには、色あせた紫色のクッションに、杖が1本だけ置かれていた。

中に入るとどこ家屋の方でチリンチリンとベルが鳴る。小さな店内に古くさいいすが1つだけ置かれていた。

「いらつしゃいませ」

柔らかな声がした。

目の前に老人が立っている。

店の薄明かりの中で、大きな薄い色の目が、2つ月のように輝いている。

「こんにちは」

と元気よく言う。

「オリバンダー、こいつに合う杖を頼む」

「セブルス……………そういうことが」

「余計な詮索はするな」

何かあるみたいだけど——気にしない方がいいみたいだ。

「あなたのお名前は？」

「ジェレミー・ポッターです」

「そうですか。そうですか。お母さんと本当似ていらっしやる。あの子がここにきて杖をかつていたのがつい昨日のことのようじゃ。あの杖は26センチの長さ。柳できていて、振りやすい、妖精の呪文にはびつたりの杖じゃった、お父さんの方はマ「ゴホンツ」ジエレミーさんの杖を選びましょうか。どちらが杖腕ですかな？」

杖腕……利き手のことか。

「右です」

「腕をのばして。そうそう」

オリバンダーさんは肩から指先、手から肘、肩から床、膝から脇の下、頭の周り、と寸法を採った。

その間、杖に関する話を話してくれた。

オリバンダーの杖は1つとして同じものはない。強力な魔力を持ったものを杖の芯にしている。売った杖は全て覚えているなど。

その後、オリバンダーさんは何本かの杖を持ってきてくれた。けれど、どれも僕には合わなく、少し困ったような顔をしている。

「これはいかなかな。 ユグドラシル 世界樹に鳳凰の尾羽。 29センチ。良質で鋭い」

と、ひらめいたように僕に言って杖を差し出してくる。

その杖を握った瞬間——急に指先が暖くなった。

杖を頭の上まで振り上げ、ほこりっぽい店内の空気を切るようにヒュツと振り落とした。

すると、杖の先から紅と銀色の火花が花火のように流れ出し、光の玉は店内を踊るように飛んだ。

「ブラボー！ すばらしい。この杖は創業当初からあるもので今の今まで使える人がおらず、杖の存在自体忘れかけておったが……あつてなによりじゃ」

「とつてもなじんで良い感触です」

「それは良かった」

「これで、全て買い終わった。漏れ鍋に部屋を取ってある。9月1日の、キングズ・クロス駅発の汽車でホグワーツに行ける。この切手に細かいことは書いてあるから良く読んでおけ。それで、今年の分の誕生日プレゼントはペットだ。フクロウではないが手紙も運べる。こいつの飼育は難しい。でも、お前ならできるはずだ」

そういつて、切符と小さな赤い鳥を僕の手につかませた。

「この鳥は不死鳥、フェニックスだ」

「ありがとう。今日は先生にお礼を言っただけだ」

「気にするな。11年分と考えれば少ないくらいだ。それでも私は多忙の身でね。ホグワーツで会おう」

「はい、先生！」

こうして僕の買い物は終わった。

杖選び（後書き）

スネイプ先生の不死鳥ですが野生にいるのを連れてたという設定です。不死鳥は育てるのが難しいのでダンブルドア以外かっという感じです。

9と4分の3番線と出会い

兄さんはダーズリー家に戻ったようだったが、僕はスネイプ先生のおかげで帰らずにすんだ。

あそこに僕の必要なものなどない。

心残りがあるとすればクモさんにお別れを言っていないことだけだ。

そんなわけで、9月1日までの1ヶ月漏れ鍋に泊まった。

宿泊期間のお金は先生が払っててくれた。

先生、ありがとうございます。

宿泊中はご飯のとき以外は神様からの本を読んで修行するか、ホグワーツの本を読むか、アウリアの世話以外何もなかった。

アウリアというのは先生から貰った不死鳥の名前だ。

まず曲弦師なのだが、1ヶ月でほとんど完成系といえるくらいまで上達した。

部屋の中には無数の糸を張って、漏れ鍋の中にも細かい糸を張ってどんな人が来たか調べたり、使いこなす訓練を多くした。

リングを糸で1ミリ四方で切ることができるようになった。

まあ、これだけでは満足していないが。

音使いは音のでももの全てをプロと同じように弾けるようになる。作曲できるようになる。

この2つを目標にしてまず取り組んだ。

半月でできるようになった。

残りの半月は音使いとしてのスキルの練習に取り組んだ。

衝撃波は7割。心身掌握は8割。

それくらいできるようになった。

まだまだ、練習が必要だ。

幻獣使いはまだペンダントの解放を制限しているため、使えるかどうか微妙だ。

ただ、アウリアがすごくなついている所から見るとたぶん大丈夫だろう。

そのアウリアなのだが、1ヶ月前は雛鳥ほどだったが今となっては立派に大きくなった。

ホグワーツに関しては全部覚えた。

先生とかは違うかもしれないが寮について、回転する階段、秘密の通路などは完璧だ。

特に面白そうだと思ったのは必要の部屋だった。

必要なものを思い浮かべて入るとそれがそこにあるみたいなのだ。学校に行ったらまず使おうと思う部屋ナンバー1だ。

それとグイディッチだが、父さんがグリフィンドールでシーカーをしていたようだった。

このクイディッチは聞くかぎり面白そうなので出れるなら出てみたい。

まあ、1ヶ月を振り返ってみればこんなものだ。

魔法の練習と教科書を全然読むことができなかったのが心残りだ。ホグワーツに行けばいくらでもできるだろう。

そして今、キングズ・クロス駅の9と10の間にきている。けれども9と4分の3番線はない。

まあ、常識的にいえば当たり前だ。

間にホームがあったら怖いし、どうやって車を停めるんだ？

そんなわけで絶賛迷子な訳だ。

先生も教えてくれればいいのに。

まあ、これはマグル世界から魔法世界に来る者への試練か何かなんだろう。

『クモさんいますか？』

『なんじゃい』

『ここら辺で鳥を持った変な人たちを見ませんでしたか』

『見たぞ。フクロウなんかもってどうするんだろつな』

『どうするんでしょうね。それで、その人たちでどっかで消えませんでしたか？』

『消えたぞ。ほら、その柵だ。それがどうした？』

『実は僕もその人たちの仲間でした。そんなわけでありがとうございます』

『良いってことよ』

よし。

その柵が入り口のようにだ。

そっちを向いたとき、僕と同じくらいの女の子が前に来た。
その女の子はカートを引いており大量の荷物がは行つたであろうトランクをのせていた。

この人も同じ？

その女の子の後ろにはマグルらしき父親と母親がいた。

でも、「9と4分の3番線はここだわ」という声が聞こえる。

「あー、すみません。この柵が9と4分の3番線の入り口ですね？」

「そうよ。あなた何も聞いてないの？」

「切符だけ貰つて聞いてなかったんで不安だったんですよ」

「その人も結構抜けてるわね。私はハーマイオニー・グレンジャー」

「僕はジェレミー・ポッター。その人抜けてなんかないと思うけどな。その人魔法薬学の先生みたいだし」

「そうなの！？」

「そうだよ」

「話してる所ごめんね。ハーマイオニー、そろそろ行かないと」

「そうよね。じゃあ、先行くわ」

「それじゃあ、汽車でね」

グレンジャー一家が先に入り、その後続く形で入る。

ぶつかる！

そう思った瞬間開けた場所に出ていた。

そして、そこに表れたのは紅色の蒸気機関車とこつたがえすた人だ。

ホームの上には『ホグワーツ行特急11時発』と、改札口のあった所には9と4分の3番線と書かれてある。

ほとんどの人が荷物を預ける中、僕はそのままスタスタと中に入っていく。

荷物はバッグに全て入れてある。

アウリアは、ペンダントの中に入れてもらった。

まだから空きな席に1人座り本を取り出す。

今日は長い旅になりそうだ……。

同い年の友達

発車の時間が近くなり、車内が騒がしくなる。

本から1度視線を外し、窓の外からホームを見る。

どの子も親との別れの悲しみと、これから過ごす1年間に期待を膨らませた顔をしていた。

兄さんは僕と同じだろう。

おじさんとのわかれなんて惜しまず、ホグワーツでの生活に心ときめかせているはずだ。

コンパートメントの扉が突然開き一瞬びっくりした。

「ここ空いてる？」

「空いてるよ。ハーマイオニーでよかったよね？」

「そうよ。席が埋まってようやく見つけた空気がここだったんだけど、あなたがいるなんてびっくりしたわ」

「僕もそうだよ」

「ジェレミーはマグル生まれなの？」

「いや、違うよ。でもマグル育ちではあるかな。親がね、赤ちゃんのときに死んじゃって預けられたんだ」

「そうなの、ごめんなさい」

「謝る必要なんてないよ。べつに辛い話してわけでもないし。一応兄さんもいたから」

「あなたってお兄さんがいたの？」

「いるよ。ここ1ヶ月は訳あって顔会わせてないけど。名前はハリーだよ」

「……ハリー・ポッター」

「そう。ハリー・ポッター。『例のあの人』を倒して額に有名な傷を持ったね」

「すごいじゃない！ 有名なお兄さんがいて」

「そうかな？ べつに兄さん自身もつい最近知ったみたいだし、漏れ鍋には行っただけでも大騒ぎだったよ。僕はあんなのごめんな。少なくともいいから友達と話してる方がいい」

「ふふ。あなたって面白いわね」

何か知らないいで笑われてしまった。
ちよつと心外だ。

でも、この子なんか可愛い。
容姿もちろんだけど、雰囲気的に。

「じゃあ、私があなたの友達になったら話し相手になってくれる？」

「それはもちろん」

「じゃあ、これから7年間よろしくね」

「こちらこそ」

差し出してきた右手を握り握手する。

そのときの彼女の笑顔は反則的に可愛かった。

こうして僕は初めての女の子と友達になれた。

そして、ちょうど話し終わる頃にまた扉が開く。

そこには丸顔の男の子が泣きべそをかいて入って来る。

「ごめんね。僕のヒキガエル見かけなかった？」

「見かけてないよ」

「私も見てないわ」

「やっぱりいなくなっただ！ 僕から逃げてばかりいるんだ！」

「何なら探してあげようか？」

「いいの？」

「いいよ。それくらいここからでもすぐできるし。君の名前とヒキガエルの名前を覚えてくれる？」

「僕はネビル・ロングボトム。ヒキガエルはトレバーって言っただ」

「ありがとう『トレバー、聞こえる？ 聞こえたら返事して』」

『聞こえるが、誰だ？』

『僕はジェレミー。君の主様、ネビル君に頼まれて探してるんだ。もし良かったら戻ってくれないかな』

『いいぞ。私も主の場所が分からなくて困ってたのだ。今は1番先頭の車両にいるから、迎えにきて欲しいと伝えてくれ』

「『了解』ネビル、一番先頭の車両にいるみたいだから迎えに行つてあげて」

「ありがとう！」

そういつて走つていつてしまった。

「ねえあなた、どうやって見つけたの？」

「話して居場所を聞いたただけだけど」

「カエル語しゃべれるの？ 私にはゲコゲコ言つてただけにしか思えなかったんだけど」

「そうだよしゃべってたよ。ちょっと距離があつたけどこれくらいなんて事ないさ」

「すごいわね」

「そんなことないよ。これは特技みたいなものだからね」

僕は汽車がホグワーツに着くまで話をしたり、どの組に入りたかなど話した。

ハーマイオニ―とはこれから仲良くやっていけそうだ。

それから、「かわいいね」と言ったら頬を少し紅く染めていた。あんまり慣れてなかったのかも。

汽車が停車し、降りたときには外はもう暗く寒かった。

やがて、ハグリッドが来て僕らを湖まで案内する。

そこにはいくつかの小舟があり、4人1組で乗るみたいだ。

ハーマイオニ―と、誰かわからない子2人と乗り込み、船はハグリッドの掛け声とともに鏡のような湖面を滑るように進む。

みんなが目の前の大きな城を黙って見ている間、僕は湖に顔を入れ水中人に挨拶をしていた。

とてもいい人たちばかりですぐ仲良くなれ、城につく時には「また今度遊びに行くからね」と言う。

湖面から顔を上げるとハーマイオニ―が何をしていたのか聞いてきたので、そのまま答えたら大きな声を上げたので目立って仕方がなかった。

そして、やっとホグワーツについたのだった。

組み分け

唐突だけど、兄さんに会いに行くの忘れていた。兄さんも会いには来てくれなかったけど。

それでも一応入学するまでに挨拶の1つくらいはしたかった。

「マクゴナガル教授、イチチ年生の皆さんです」

「ご苦労様、ハグリッド。ここからは私が預かりましょう」

先頭を行っていたハグリッドが声をかけた人はエメラルド色のローブを着た背の高い魔女だった。

いかにも厳しそうな雰囲気を出している。

「ホグワーツ入学おめでとう。新人生歓迎会がまもなく始まりますが、大広間の席につく前に、皆さんが入る寮を決めなくてはなりません。寮の組み分けはとても大事な儀式です。ホグワーツにいる間、寮生が学校での皆さんの家族のようなものです。教室でも寮生と一緒に勉強し、寝るのも寮、自由時間は寮の談話室で過ごすことになります。寮は4つあり、それぞれ輝かしい歴史があり、偉人や魔女や魔法使いが卒業しました。ホグワーツにいる間、皆さんの良い行いは、自分の属する寮の得点になりますし、反対に規則違反したときは寮の減点になります。学年末には、最高得点の寮は大変名誉ある寮杯が与えられます。どの寮に入るとしても、皆さん1人1人が寮にとって誇りとなるよう望みます。まもなく全校列席の前で組み分けの儀式が始まります。待っている間、できるだけ身なりを整えておきなさい」

マクゴナガル先生は赤毛の男の子と、ヒキガエルを探してあげた男の子の方を見ていた。

彼らは、そそくさと身なりを整える。

「学校側の準備ができたら戻ってきますから、静かに待っていてください」

先生がいなくなった。

瞬間周りの人たちは、ガヤガヤとどこの寮に入りたいかとか、どうやって組み分けをするのかとか、話し始める。

その中に僕は兄さんを発見した。

「兄さん」

「うおつ。おどかすなよ、ジェレミー。汽車に乗ってたなら挨拶の1つくらいしにこいよ」

「ごめんね。だから、いま声かけたんだけど」

「君誰？」

兄さんの隣にいた赤毛の男の子が聞いてくる。

「こいつは僕の弟、ジェレミーだ」

「僕はロン・ウィーズリー。よろしく」

「こちらこそ。……………じゃあ、僕もうあっちに行くね。友達がいるんだ」

そう言って、ハーマイオニ？のいる方に戻る。

「どうだった、お兄さんは？」

「元気そうだったよ。友達もできたみたいだし」

「そう。良かったわね」

それから少しばかり時間が経ち、マクゴナガル先生がやってきた。

「さあ行きますよ。組み分けの儀式がまもなく始まります」

と、厳しい声で言う。

みんな結構緊張しているようだ。

僕は知っているからそんなことはないし、ワクワクしているくらいだった。

ハーマイオニ？には組み分けの仕方を教えてあげたんだけど、どの寮に入るかで緊張しているようだ。

「さあ、1列になって。ついてきてください」

マクゴナガル先生がスタスタと歩いて行く。

僕らは、玄関ホールを通り、そこから二重扉を通って大広間に入った。

そこには、夢でも見たことのない、不思議で綺麗な空間が広がっていた。

何千というろうそくが空中に浮かび、4つの長いテーブルを照らす。

テーブルには上級生たちが着席し、キラキラ輝く金色のお皿とゴブレットがある。

広間の上座にはもう1つ長いテーブルがあり、先生が座っていた。

マクゴナガル先生は、上座のテーブルの所まで引率し、上級生に顔を向け、先生に背を向ける格好で1列に並ばせた。

「本当に空に見えるように魔法がかけられているのよ。『ホグワーツの歴史』に書いてあったわ」

ハーマイオニーが説明してくれる。

けれど、それを聞くよりも椅子の上の帽子に興味が映っていた。

つぎはぎの、ボロボロで、とても汚らしい帽子だ。

これが組み分け帽子かと、感心する。

こんな姿になっても、組み分けをするというのがカッコいい。

そして、その帽子がついには歌いだしたのだ。

それが終わると、広間にいた全員が拍手喝采をした。

4つのテーブルにそれぞれお辞儀をして、帽子は再び静かになる。

帽子の歌はとても興味深い内容だった。

母さんの本によると、毎年歌詞が違うらしい。

まあ、内容はあまり変わらないようだが。

こうして組み分けは始まった……。

僕の寮

「名前を呼ばれたら帽子をかぶって椅子に座り、組分けを受けてください。アボット・ハンナ！」

マクゴナガル先生の生徒を呼ぶ声とともに、ピンクの頬をした、金髪のお下げの少女が、転がるように前に出てきた。

帽子をかぶると目が隠れるほどだ。
椅子に腰をかけた。

一瞬の沈黙……………

「ハツフルパフ！」

と帽子が叫んだ。

右側のテーブルから歓声と拍手が上がる。

それから、何人もの人が続々と呼ばれ、寮が決まって行く。

一瞬で寮を言い渡すときもあれば、沈黙が長いときもあった。

そして、ハーマイオニーの名前が呼ばれる。

走るようにして椅子に座り、待ちきれないようにグイッと帽子をかぶった。

「グリフィンドール！」

彼女は満面の笑みを浮かべグリフィンドールのテーブルについた。
そのとき僕に向かって微笑んできたのは気のせいだろうか。

彼女は汽車の中でグリフィンドールに入りたいと言っていた。

ただその資格があるのか不安だとも言っていたのだ。

僕はそんな彼女に、自分が行きたい所をしっかりと帽子に伝えれば良いと助言した。

そしたら、帽子もしっかりわかってその寮に入れてくれるよともつけたした。

彼女は数刻考えるような表情をしてから、それまでの憂いがなかったように元気になったのだ。

そんな彼女が念願の寮に入れてよかった。

そしてまた順々に名前が呼ばれついに兄さんの番がくる。

「ポッター・ハリー！」

兄さんが前に進み出ると、突然広間中にシーツというささやきが波のように広がった。

「ポッターって、そう言った？」

「あのハリー・ポッターなの？」

広間の中の人たちは兄さんを好奇の視線で見ていた。

いや、動物園のライオンを見るような目かもしれない。

ただ、それだけ「ハリー・ポッター」という名前は有名なんだろう。

兄さんが帽子をかぶる。

「フーム」

低い声で兄さんに聞こえるくらいで帽子が言う。

音使いの修行で小さい音でも聞こえるようになったからわかる。

「むずかしい。非常に難しい。ふむ、勇氣はある。頭も悪くない。才能もある。自分の力を試したいというすばらしい欲望さえ持っている。いや、おもしろい……さて、どこに入れたものかな？」

「スリザリンはダメ。スリザリンはダメ」

と兄さんは繰り返している。

なんでスリザリンはダメなんだろう？

来るまでに何かあったのかな？

「スリザリンは嫌なのかね？ 確かね？ 君は偉大になれる可能性があるんだよ。その全ては君の頭の中にある。スリザリンに入れば間違いなく偉大になれる道が開ける。嫌かね？ 良いかも？ どっちにする？ 悩むな、少年よ！ どちらだ！ そうか……なら、グリフィンドール！」

兄さんは帽子を脱ぎグリフィンドールの席にフラフラと歩いて行く。そして、今までで最高の割れるような完成に迎えられていた。

「ポッターを取った！ ポッターを取った！」と、さっき見たこと同じ赤毛の双子が叫んでいる。

兄さんは有名人だな。

組分け1つでこんなだけ騒ぎになるなんて。

次は僕の番だ。

「ポッター・ジェレミー！」

マクゴナガル先生が僕の名を呼ぶと兄さんのときとは逆にかなり騒がしくなった。

「ポッターって、え！？ 何で2人？」

「兄弟？」

「どういうこと？」

みんながみんな僕の存在に疑問を持っているようだ。

まあ、兄さんよりかなり知名度が低いから当たり前かもしれないけど。

そんな中、スタスタ椅子まで歩き帽子をかぶる。

「これまた、難しい。さつきより難しい。勇気もあれば、才能もあり、頭も良い。加えて優しくもある。それに嫉妬と欲望。兄さんに勝ちたい、有名になりたいか……。どこが良い？ お前ならどこでも偉大になれるぞ」

「ならスリザリンにして欲しいな。好きな先生がその出身なんだ」

「いいのか？ お前の父さんも母さんもグリフィンドールだったぞ」

「べつにいいよ。それに兄さんがいるし」

「ならば決まりだな。スリザリン！」

スリザリンの席の上級生からは歓声と拍手で迎えられた。

僕はハーマイオニ？の方を見て微笑み、駆け足でスリザリンの席に行く。

僕の座った横には制服を買った店であった子がいた。

「マルフォイ君もスリザリンなんだね。これからよろしく」

「ああ。君はポッターなのかい？」

「『例のあの人』を倒したのはグリフィンドールに入った、兄のハリー・ポッターだよ。僕はその弟」

「そうだったのか。話しにあまり聞いたことがなくてびっくりしたよ」

「そうだろうね。まあ、この話しはすぐに広まるはずだ。たぶん兄さんにみんな聞くはずだからね」

「有名人も辛いもんだだろうね」

僕は頷く。

ちょうど他の人の組分けも終わり、校長先生が歓迎の挨拶をする。そして、彼の挨拶が終わると同時に杖を一振りして、目の前にある大皿を食べ物でいっぱいにしてみせた。

この人すごいな。

母さんの本にもダンブルドア先生は『とにかくすごい』と書かれていた。

納得だ。

こうして宴は始まる……………。

僕と兄の関係

料理があらかた食べられると、今度はデザート山がでてくる。

料理を食べている間僕のことを話題にあがった。

兄さんとの関係。

どんな所で育ったか。

両親はどうなのか。

『例のあの人』から生き残ったこと。

まだまだたくさん質問された。

途中答えづらいところは言葉を濁しながらも、しっかり答える。

けれど、誰が言ったのかわからないがこの一言は心にまっすぐ突き刺さってきた。

「君ってお兄さんがいなければ死んでたんだ。なんで生き残ってるの？『例のあの人』の汚点のままじゃん。スリザリンに入ったんなら死んでよ」

どうしてこんなこと言うの？

もちろんこの人以外のほとんどの人が気にすることないよと言ってくれた。

そして、言った誰かを注意していた。

僕はそのとき兄さんと僕の関係って何なんだろうって考えてた。

生き残った兄弟。

有名人の兄と普通以下な弟。

優遇される兄と相手にされない弟。

それは、光と影。

でも、でも、でも、僕は囚われない。

おりの中にはもう閉じ込められない。

ホグワーツという飛ぶ立つための場所に來たのだ。

ここで僕は光になる。

そのための力だって手に入れる。

仲間だって。

だけど、そこに兄さんはいなくて良い。

いや、いてはいけない。

僕は兄さんと決別する。

これからはただの同じ学校に通う1年生。

僕だけの決断。

ただの決意。

兄さん……いや、ハリーに伝える。

今の僕の気持ちを。

この決断を。

そうだ、それでいい。

意識が外に向く。

僕は俯いてぶつぶつ言っていたようで、ずいぶん落ち込んでるよう
に見られていたようだった。

周りの席の子たちが心配してくれている。

「だいじょうぶだよ。心配してくれてありがとう」

これからこの寮にいる人たちが家族なんだ。

僕のことを心配してくれる。

ただそれだけのことなのに、とっても胸があたたかくなって。

やつと自由と家族を得られた気がする。

「エヘン——全員よく食べ、よく飲んだことじゃろうから、2言、3言。新学期を迎えるにあたり、いくつかお知らせがある。1年生に注意しておくが口内の森に入ってはならん。これは上級生にも、何人かの生徒たちに特に注意して置く。

管理人のフィルチさんから授業の合間に廊下で魔法を使わないようにという注意があった。

今学期は2週目にクディッチの予選がある。寮のチームに参加したい人はマダム・フーチに連絡してくれ。

最後じゃが、とても痛い死に方をしたくない人は今年いっぱい4階の右側の廊下に入ってはならん」

残念。森に入ってみたかったのに。

魔法生物なら怖くないんだけどな。

それでもだめなのかな？

今度スネイプ先生に聞いてみよう。

あと4階の廊下には何があるんだ？

これも聞いてみようかな。

「では、寝る前に校歌を歌おうかの。みんな自分の好きなメロディ

「で。では、さん、し、はい！」

みんなバラバラに歌い終えた。
とびきり遅い葬送行進曲で歌っていた赤毛の双子が最後まで残っていた。

僕はといえば音使いのスキル練習もかねてここにいる人たちが幸せな気分になれるように歌った。

近くの席にいた人たちは何故かこちらを向いている。

もしかして、下手だったのかな？

まだ、僕の歌誰にも聞いてもらったことなかったからそうなのかも。

「僕の歌下手だった？」

「そうじゃないわよ。とてもうまかったわ。みんなあなたの声に感動してたのよ」

「そうだったんだ。嬉しいな！」

隣にいた女の子に聞いてみると褒められた。

でも、頬を紅くしてたから、熱でもあったのかな。

長旅で疲れたんだろう。

そうに違いない。

こうして宴は幕を閉じ、僕たちは監督生と呼ばれる上級生につれられ寮に行く。

入ってすぐの所は談話室となっていて、とても居心地が良さそうだ。
ふかふかした肘掛けの椅子もたくさんある。

そして、所々へびをあしらった模様が入っていてかつこ良い。

監督生の指示に従い女の子は女子寮に続くドアから、僕ら男は男子寮につながるとドアからそれぞれの部屋に行く。

階段を上って行くと緑色のビロードのかかた、4本柱の天蓋付きのベッドが5つ置いてあった。

その5つの内1つにマルフォイがいたのはとっても嬉しいことだ。

けれど、クタクタに疲れた僕らにはしゃべる元気もなく、みんなパジャマに着替えるとすぐに寝ていた。

僕も3分と立たないうちに夢の世界に飛び立って行くのだった。

必要の部屋

翌日、目を覚ますとまだ日が昇りかけで窓の外は薄暗い。

まだ他のルームメイトは寝ているみたいだ。

そんなわけで左手のブレスレットから糸を出していく。

目に見えないほどの細い糸は僕の手によって縦横無尽に校内を駆け巡る。

その糸からは、どの先生が何をしているかなど手に取るようにわかった。

けれど、ハーマイオニーとハリーしか良く知らないから、生徒の動きまではわからない。

友達のことだけわかればいいか。

そんなわけで、ハーマイオニーにだけ少しばかり糸を集中させた。

そうこうしているうちに太陽はすっかりとのぼり、朝を告げている。ルームメイトの子たちも目を覚まし始めたようだ。

今日から勉強頑張らないと！ と気合いを入れ制服に着替え始めた僕だった。

魔法史、薬草学、妖精の魔法と授業を受けたのだが、正直退屈だ。

どれもこれも、教科書を見たら全部のっているからだった。

だから、授業中に半分ほど教科書を読み進めてしまったのだ。

これなら他の授業も簡単だなと思ったが、その予想は外れてしまう。

それは、変身術の授業の時のことだ。

「変身術は、ホグワーツで学ぶ魔法の中でもっとも複雑で危険なも

の1つです。いい加減な態度で私の授業を受ける生徒は出て行ってもらいますし、2度とクラスに入れません。初めから警告しておきます」

教室に入って早々こんなことを入れた授業は初めてだ。それから、机を豚に変え、またもとの姿にしてみせた。

周りみんな感動してはやく試したくてウズウズしているようだ。

「しかしみなさん。これをできるようになるにはまだまだ時間がかかります。何も知らないあなたたちでは早くても3年かかるでしょう。何なら試してみますか？」

この一言は教室の空気を沈めるには十分な威力があった。でも僕はものは試しと、

「僕やってみます！」

そういつて、先生と同じように杖を振り、イメージする形に魔力を込める。

杖から銀と紅の光が放たれ――

「……………おしかったですね、ミスター・ポッター」

俺が変えた机は、足以外は豚になったのだ。動けない豚もとい机は何とも哀れだった。

けれど、クラスメイトは腹を抱えて笑っている。

どこにうける要素があったのかな？

そのあとマクゴナル先生は元に戻しスリザリンに3点をくれた。

「今回のミスター・ポッターのように変身術は一步間違つと今回のようになります。だから、むやみやたらに使つてはなりません。しっかりと授業を受け内容を理解し、しっかりと練習していきましょう」

時間が流れるのは早いものだ。

ついさっきまで授業を受けてたかと思うともう夜になる。

今日の夜中必要の部屋に行こうかと思う。

見回りの先生などもわかつているから怒られることはないはずだ。それに入学翌日で規則を破るなんて思つてもみないだろう。

そんなわけで夜も良い感じで更け、口笛を吹きながら談話室から廊下へとでる。

『ジェレミー・ポッター作曲 NO.3 迷路』

音使いのスキルを使った認識障害。

口笛が聞こえるものはそこにいると認識できなくすることができる。

回転する階段や隠し扉などホグワーツをそれなりに知っているからなんの苦もなく目的の場所までたどり着いた。

そこで、訓練できる時間と場所が欲しいと心のうちで言いながら3回ほど往復する。

すると、並んで2人ほどこか入れないほどの扉が表れ、急いで中に入る。

中は4つの部屋に別れていた。

まず右の扉から1つ目の部屋に入れる。

1つ目の部屋から2つ目の部屋に入れる。

2つ目の部屋から3つ目の部屋に入れる。

3つ目の部屋から4つ目の部屋に、そして左の扉からでる。

そして1つ目の部屋には砂時計と1枚の紙が机にぽつんと置かれている。

なんだ？

『逆転時計 1度ひっくり返すと1時間時が戻ります。

自分に自分が見られないように使いましょう』

と書かれていた。

とりあえずうまく過去の自分に見つからないようにすれば良いんだ。それと、誰かいても見なければ良い。

20時間仮眠も取りながらしつかりと修行と勉強ができました。

そして、朝はまた始まる。

森の中にいる動物の鳴き声はおはようと言っている。

フクロウは手紙をくわえているから鳴けない。

太陽はサンサンと光りを降り注ぐ。

疲労感のたまった身体をほぐしながら見る朝のホグワーツはとても綺麗だ。

魔法薬学の先生

今日はグリフィンドールと合同で初めての魔法薬学の授業がある。スネイプ先生の授業を受けられることもあって今日の朝食は昨日の3倍食べた。

そして、いま教室とに來ている。

まあ、地下牢なんだけどね。

他の教室よりも寒いし、壁にはガラス瓶の中でアルコール漬けの動物がぶかぶかしている。

その教室を見渡してみると、少し離れた席にはハーマイオニーがハリーの隣に座っていた。

なんで？

そう思ったとき、ちょうど先生が扉を開けて入ってきた。

まず、他の先生と同じように出席を取り、ハリーの名前の所でまとった。

「ああ、さよう。ハリー・ポッター。我らが新しい——スターだ」

猫なで声でハリーに向かって言う。

マルフォイはいつも隣にいる子と、冷やかしを込めてわらう。

僕はただ先生の目をずっと見ている。

先生の目は冷たくて、うつろで、暗いトンネルを思わせるように見えるが、よくよく見ると、小さくだがあたたかく優しい光をともしていた。

ただ、僕を見ている時だけなのかもしれないけど。

「このクラスでは、魔法調剤の微妙な化学と、厳密な芸術を学ぶ。杖を振り回すような馬鹿げたことはやらん。そこで、これでも魔法かと思う諸君が多いかもしれん。フツフツと沸く大釜、ユラユラと立ち昇る湯気、人の血管の中をはい巡る液体の繊細な力、心を惑わせ、感覚を狂わせる魔力……諸君がこの見事さを芯に理解することは期待しておらん。吾輩が教えるのは、名声を詰めにし、栄光を醸造し、死にさえふたをする方法である——ただし、吾輩がこれまでに教えてきたウスノロより諸君がましであればの話しだが」

大演説のあと、教室は静まり返っていた。

先生のこの言葉は魔法薬学とは何かを語り、その資格を見極めると、言いたいのだろう。

ならば、僕は必ずその期待に応える。

初めてあった日にもそういったから。

だから、昨日は必死に勉強した。

一夜漬けかもしれないけど、それなりには覚えた自身はある。

ウスノロではないと先生に早く理解してもらいたくてウズウズしている。

それと、僕と同じようにもう1人ウズウズしている人がいた。

それは、ハーマイオニーだ。

彼女は列車の中で話した限り、かなりの勉強好きでありながら、天才でもあった。

「ポッター！」

と、突然先生が呼んだ。

「はい！」

「ジェレミー、お前ではない。ハリー・ポッターの方だ。ポッターはお前の兄さんの呼称だ」

そういつて、咳払いをしながらハリーの方を向く。

「アスフォデルの球根の粉末にニガヨモギを煎じたものを加えると何になるか？」

ハリーの頭には？マークがいくつも浮かんでいるように見える。
そして、赤毛の子、たぶんロンをチラツと見るが、「降参だ」という顔をしていた。

ハーマイオニーは空中に高々と手を挙げている。

「わかりません」

「チツ、チツ、チ——有名なだけではどうにもならんらしい。
ではもう1つ聞こう。ベゾール石を見るけて来いといわれたら、どこを探すかね？」

ハーマイオニーはさっきよりも高く、椅子に座ったままの限界まで手を挙げている。

ハリーには何がなんだかさっぱりなんだろう。顔に書いてある。

「わかりません」

「クラスにくる前に教科書を開いてみようとは思わなかったわけだな、ポッター。え？」

最後だ、モンクスフードとウルスベーンとの違いは何だね？」

「わかりません」

ハリーは落ち着いた口調で言った。

ハーマイオニーは立ってまで手を挙げていた。少し落ち着いたほうが良いんじゃないかな。

「では、ジェレミー答えてみなさい」

「アスフォデルと、ニガヨモギを合わせると、眠り薬になるはずで
す。ただ、あまりに強力なために『生ける屍水薬』と言われている
す。ベゾアル石は山羊の胃から取り出す石で、たいていの解毒剤
になります。モンクスフードとウルスベーンは同じ植物でトリカブ
トのことを指します」

「正解だ。スリザリンに5点」

記憶力には自信があったけど、答えられてよかった。

「諸君、何故彼が言ったことをノートに取らない？ お前たちは答
えられたのか？」

先生がすこむように言うと、すぐに羽ペンを出し書く音が教室中に
広がる。

ただハーマイオニー？だけは書いていなかった。
たぶん覚えているからだろう。

その後、魔法薬の授業は順調に進んだ。
ただ、グリフィンドールの扱いがスリザリンに比べれば少し悪い気
がしたが気のせいだろう。

ハリーは良く当てられ、間違えてマルフォイたちに笑われていた。

ハリーはスター（笑）だね。

顔を歪めて僕を睨んできているが知らん顔をする。

だって、教科書読んでこない方が悪いんだから。

カエルの子——ネビルが大鍋を溶かし、教室が一時騒然とした。

そのとき先生はとっさに生徒をかばい、すぐにこぼれたした薬を消した。

「君、ポッター、針を入れてはいけな何故言わなかった？ 彼が間違えれば自分の方がよく見えると考えたな？ グリフィンドールは1点減点する」

ハリーならやるんじゃないかと思う。

思い出せばいつも僕の作品がハリーのよりよいと壊されていた。

その時は兄さんがするはずないと思っていたから仕方ないかもしれないが、今となってはちょっとカチンとくる。

でも、先生が注意してくれたからいつか。

こうして、初めての魔法薬の授業は終わった。

僕の友達マルフォイ

入学してから幾日か過ぎ、慌ただしかった日々もようやく落ちつきを取り戻してきた。

授業の方も何ら問題なく、修行の方もあと少しで完成という所まで来た。

ここ最近7時間×8回＝56時間でやったかいがある。

そんな中僕は仲の良い友達ができた。

それは、洋装店でもあったことのあったマルフォイだ。

ハリーのことを笑ったり、自分を従えて高圧的な話し方をするが対等な立場の友達には普通だった。

グリフィンドールが嫌いや、純血が優れているなどは親かいわれ続けたからみたいだ。

もし、うっかりべつに純潔でなくてもいいなどといった日には父親にこつてりお仕置きされるみたい。

話を聞いているうちに何か不憫に思えてきたりした。

彼は本当はとてもやし優しいひとなのだ。

ただ、育てられ方を少し間違えただけ。

何となく僕に似ているなと思う。

まあ、そんなことがあったのだが、今は飛行訓練に行く途中だ。

マルフォイが寝る前などに話してくれたのだが、1年生がクイディッチ・チームの寮代表選手になれないなんて残念だと言っていた。

危ない競技だから仕方ないといえば仕方ないかもしれないけど、あんまり納得したくない。

決まりだから仕方ないことだけど。

それにしてもクイディッチは魔法界では人気みたいだ。

魔法使いの家計の子はみんなその話を良くする。

いつから箒に乗り出したとか、どのチームの誰が好きだとか。

僕としても箒には早く乗ってみたかった。

それが今日叶うのだからとてもワクワクしている。

一応、図書館であつたハーマイオニ？に「クイディッチの本知らない？」と聞くと『クイディッチ今昔』という本を紹介され読んだ。なかなか面白くて一気に読んでしまった。

その中にスニッチがスニジェットと呼ばれる鳥が使われていたと書かれおり、今度必要の部屋でスニエットを呼び出してみようと思つた。

校庭につくと既にほとんどの生徒がいる。

よく晴れた少し風のある日で、足下の草がわさわさ波立っている。

そんな芝生の上に20本の箒が並べられていた。

その一本の横に立ち、ぼーっとしながら数分待っているとかけながらやってくるハリーとロンの姿が見える。

そのすぐあとには、まだム・フーチがやって来た。白髪を短く切り、鷹のような黄色の目をしている。

「何をばやばやしているんですか」

開口一番にハリーたちをお叱りになっています。手のかかる生徒がいると、先生も大変なんだな。

「みんな箒の側に立って。さあ、早く」

そういつて散り散りになっていたグリフィンドールの生徒が箒の側にすぐ集まる。

「右手を箒の上に突き出して」

先生が掛け声をかける。

少し古そうだがまだまだ現役で頑張れるぞといった感じの箒に手を向ける。

「そして『上がれ!』と言う」

「↑↑↑↑↑ 上がれ!」「↑↑↑↑↑」

というみんなの叫び声が中庭に響きわたる。

僕の箒は呼びかけに答えるかのようにすぐに手の中に収まった。無意識的に音使いのスキルを使ったようにすんなりできたので驚いた。

周りを見るとマルフォイは2回目で成功。

ハーマイオニ?の箒は地面をコロリと転がり続けていたが、十数回を数えた頃には手に収まっていた。

次に先生は箒の端から滑り落ちないように箒にまたがる方法をやってみせる。

一発合格の僕だったが、マルフォイは間違いを指摘され顔を真っ赤に染めていた。

ただ、それでも間違いをしっかり直し次は間違えないようにとする姿勢はとつてもかつこ良かった。

それを笑うハリーとロンがいたが、逆にその姿を見て笑って内心笑

う。

「さ、私が笛を吹いたら地面を強く蹴ってください。箒はぐらつかないように押さえ2メートルくらい浮上して、それから前屈みになつてすぐにおりなさい。笛を吹いたらですよ——1、2の——」

ところがネビルが笛が鳴る前に地面を強く蹴ってしまう。

「こら、戻ってきなさい！」

先生の声をよそに、ネビルは上昇を続け真つ青な顔のネビルが声にならない悲鳴を上げ、箒から真つ逆さまに落ちた。
そして……………

ガン！——ドサツ、ポキツという音をたてて、ネビルは草の上
にうつぶせに墜落した。

先生はネビルと同じくらい真つ青になって、

「さあさあ、ネビル、大丈夫。立って」

そう言つて抱きかかえられる。

「私がこの子を医務室に連れて行きますから、その間誰も動いてはいけません。箒もそのまま置いておくように。さもないと、クイデ
イッチのクを言う前にホグワーツから出て行つて貰いますよ」

僕たちに向けてこう言つて去つて行つた。

2人の声が届かない所まで行つたとたん、マルフォイは笑い出した。

悪い癖がでたなと思った瞬間には、

「あいつの顔見たか？ あの大間拔けの
と、言ってしまう。」

面倒ごとになりそうだ。

特にグリフィンドール、スネイプ先生曰く勇敢バカがいるから……
……。

理不尽なこと

「おー、こんな所にロングボトムのばあさんが送ってきたバカ玉があるじゃねえか」

そう言つて、草むらの中から『思い出したま』を拾いだした。

「マルフォイ、こっちへ渡してもらおう」

ハリーはの静かな声で、ガヤガヤとしていた外野はおしゃべりをやめる。

「は？ 何だつて？」

「こっちへ渡せ！」

「なんでだよ！」

「何でもいいからこっちに渡せ！」

ハリーとマルフォイが言い合いをしている。

ただこの状況を見ればハリーの方が理不尽なことを言っている。

マルフォイは拾つてあげて返そうと思つてゐるはずだ。

それを無理矢理渡せなんて……。

「それじゃ、ロングボトムがあとで取りにこられることに置いておくよ。そうだな——」「こっちに渡せたら！」もういい。渡してやる」

ハリーの物言いにしびれを切らしたであろうマルフォイは思い出しだまを思いっきり投げた。

僕は思う。

ハリーはたぶん自分がネビルに渡して何か得しようって魂胆だ。僕がおじさんたちの家にいた時のような顔をしている。

だからマルフォイのしたことは仕方ないと思う。

「ダメ！ フーチ先生がおっしゃったでしょう、動いちゃいけないって。私たちのみんなが迷惑するの！」

ハーマイオニ？の叫び声がする。

上空を見上げると、ハリーが箒にまたがり思い出し玉めがけて飛んでいた。

周りの女の子たちが息をのみ、キャキャー言う声、ロンが感心して歓声を上げている。

うるさくて仕方ない。

ハーマイオニ？の言っていることがもつともだつてのに。

それでも、ハリーは箒の使い方が感覚でわかっているようにドンドン加速し——地面につく間一髪の所で玉をつかんだ。

その後箒を引き上げ、水平に立て直し、草の上に転がるように軟着陸した。

思い出し玉をしっかりとてのひらに握りしめたまま。

「ハリー・ポッター……！」

ハリーは何とも誇らしげな顔だった顔が急に青ざめながら声の方を

向く。

そこにはマクゴナガル先生がいた。

「まさか——こんなことホグワーツで一度も……」

先生はショックで言葉もでなかった。

眼鏡が激しく光っている。

「……よくもまあ、そんな大それたことを……首の骨を折ってたかもしれないのに——」

「先生、ハリーが悪いんじゃないんです」

「お黙りなさい。ミス・パチル——」

そうだそうだ。

悪いのはハリーだ。

なんでマルフォイが悪いんだよ。

あんな物言いで行われたら誰だってキレるって。

「でも、マルフォイが……」

「くだいですよ。ミスター・ウィーズリー。ポッター、さあ、一緒にいらっしやい」

ざまあみろ。

マルフォイに理不尽なことだったり、ハーマイオニ？の言うこと聞かないからこんなことになるんだよ。
罰則でもうければいいのに。

先生は大股に城に向かって歩き出し、ハリーは麻痺したようにとぼとぼついていた。

その後、ネビルを医務室に送ってきたフーチ先生はこの状況を見て、授業が説教で全部つぶれた。

こんなところで、僕はハリーのとぼつちりを受けるんだ。

その日の夕食時、ハリーとロンが話しているのが聞こえてきた。

なんで、言われたことやぶって、1年生でなれないクディッチの選手になれるの？

こんなの絶対おかしいよ！

他の1年生にもチャンスを与えるべきだ！

マルフォイでって家でやってたって言うし、なんでハリーばかり！有名だから？ 『例のあの人』を倒したから？

こんなのふざけてるよ……………。

僕とクイディッチとハリー

今僕の目の前にはスネイプ先生がいる。

それは、何故ハリーが１年生でシーカーになれたのか聞きためだ。

「先生、なんでハリーだけ１年生でクイディッチの寮代表になれるんですか？」

「マクゴナガル先生が校長を説得したからだ」

「それで、こんなに簡単になれるんですか？」

「いや、無理だな」

「じゃあ、なんで！」

「校長も特別扱いしているのだろう。『例のあの人』を倒した英雄だからな。世間的に見ればだが」

「先生はそうは思わないんですね」

「そうだ。あんなのが英雄なんて魔法世界も終わったようなものだ」

「じゃあ、僕を手伝ってください。まず、今期の１年生全員に寮のクイディッチのメンバー選抜の権利が欲しいです」

「当たり前だな。ポッターだけがなれるなど不公平きわまりないな。ダンブルドア校長の所に行こうか」

「僕もですか？」

「そうだ。元々はお前の提案なのだろう」

「そうですね」

こうして、先生の部屋から校長室に向かっている。
スネイプ先生と並んで歩くと親子みたいだ。
少しばかりはなれている校長室まで歩くのは数分かかる。
でも、その数分が今は幸福に感じられた。

「レモンキャンデー」

先生が校長室の前で合い言葉を唱えると、ワシ型のガーゴイルの階段は僕たちを乗せて回る。

そうすると、立派な扉があり重々しい感じだった。

「校長はいります」

そういつて先生は扉を開けた。

そこにはいくつもの魔法具と書類や本。

歴代の校長の額縁。

それと不死鳥。

先生の部屋とは違い、この部屋は威厳のある部屋だった。

「ジェレミーを連れてどうしたのじゃセブルス？」

「校長！ 何故ポッターだけがクイディッチに1年生から参加できるのです！ あれは危ないからと1年生には禁止にしたのでしょ

「！」

「それはじゃな、あやつなら大丈夫だと思ったからじゃ」

「それだけでですか！」

「そうじゃ」

「校長先生、それはおかしいですよ。なんで校長先生が大丈夫だと思ったら良いんです？ これは公平じゃありませんよ。1年生全員を見て、大丈夫か大丈夫じゃないかの判断をしてください」

「もう見ておる」

「嘘だ！ 前回の授業はハリー以外まともに箒に乗っていない。それでなんでわかるのです！」

「僕は何年も生徒を見てきた。何千人では足りん数をな。それだけ見ればあれだけでもわかる」

「それだけでなんて……おかしいよ……」

「セブルス、連れて行け。ここで何を話しても無駄じゃ」

「行くぞ！」

「ま、待って下さい……………」

「なんで、なんで、なんで？
先生は僕の味方じゃないの？」

まだ、僕は納得できてない！

「いいからでるぞ。話しはその後だ」

そう小声で言って僕を校長室から引きずり出す。

そのあと、無言で先生の部屋までつれられた。

「ジェレミー、校長はダンブルドアだ。わかるか？ 『例のあの人』ですら唯一恐れた魔法使いだ。それは何故だと思う。それは経験と豊富な知識から導きだされる策があるからだ」

「だからって、校長先生のいつてることはおかしいよ。それに、なんで先生は説得をとてつだってくれなかったの！？」

「まだ、策はある。試合中にポッターを危ない状況に追い込めばいいのだ。そうすれば校長も考えを改めざる終えない」

「そうか！ 1年生がでる権利を得るんじゃないくて、ハリーが持つ特別な権利を剥奪すればいいんだ」

「そういうことだ。お前ならば簡単であろう。ばれずにやれ。私は応援しているからな」

「はい、先生」

こうして、僕は部屋に戻った。

そうだ、これからはもっと修行と勉強を頑張らなきゃ。

万全を期すために、フェリックス・フェリススを使おう。
そのためには作らなきゃ。

あと、箒に乗る練習もしようかな。

2年生からは寮代表になってやる！

この日を境に、僕の必要の部屋を使う時間が5倍になった。

ケロちゃん

あれから数日たったある日、図書館でハーマイオニ？と会う約束をしていた。

彼女はハリーとロンとそれなりに仲が良いみたいだったが、彼らみたいにスリザリンを苦手とはしていないみたいだ。もしかしたら、僕だけなのかもしれないが。

「やあ、ハーマイオニ。今日はどうしたの？」

「あのね、ジェレミー、ちょっと前なんだけど、立ち入り禁止にされている部屋に間違っではいつてしまったの」

少し深刻そうに、怯えるように彼女はいった。

「そこにはね、ケロベロス三頭犬が眠っていたのよ。何かを守るみたいに扉の上に座っていたわ」

「そうなんだ。三頭犬がー、見てみたいな」

「今のを聞いた感想がそれ？ あなたらしいはね」

「そうかな？ 普通だと思うけど。でも、どうしてそんな所にいたのさ？」

「ハリーと、ロンがねマルフォイと夜中に決闘するとか言ってるから出て行くのをちょうど見たの。そんなことしたら寮の点数が減点されるじゃない？ だから私ついて行っただの」

「なんでそんな危ないことするのさ！ 君までいたらもつと危ないじゃない」

「べつに大丈夫よ。それでも私、魔法は得意なんだから」

「それでも……」

「ありがとう。心配してくれて。やっぱりあなたが私の友達で良かったわ」

「本当に？」

「本当よ」

「だったら、今度から危険なことはしないって誓って。もし、するんだったとしても僕に絶対相談して」

「わかったわ」

「ありがとう」

このあとは、魔法についてや学校生活とかたわいもない雑談をして過ごした。

その夜、僕は必要の部屋ではなく、彼女の言った三頭犬のいる部屋に向かっている。

いつものように口笛を吹きながら石造りの廊下を歩く。

カツンカツン――

靴の音は廊下に反響する。

けれどそれも、夜の学校という不気味な空間にはとてもあっており、また誰にも聞こえない音でもあった。

そこら辺は音使いのスキルが関係している。

たまに壁からでてくるゴーストには一瞬肝を冷やしながらも目的の部屋へとつく。

「アロホモラ」

解錠の呪文を唱え扉を開けるとそこには床から天上までの空間全部が三頭犬で埋まっていた。

頭が3つ、血走った3組の可愛らしいギョロ目。

3つの鼻がそれぞれの方にひくひく、ぴくぴくしている。

3つの口から黄色い牙をむき出し、その間からヌメヌメとした縄のようにだらりとよだれが垂れ下がっていた。

『ケロちゃん！　なんて情けない姿をしているんだ！　ちゃんと手入れはしないとダメ！　僕が洗ってあげるからおとなしくしているんだよ』

『お前は誰だ！　ここから先は通さんぞ』

『そんなの今はどうでもいいよ。いい子だから僕の言うことに従って。まずは、毛並みを整えなきゃね』

『どういうことだ？』

『ケロちゃんはかつこいいんだからもっと身だしなみはしっかりしなきゃもてないよ。これから先ずっとここにいるわけじゃないんでしょう？』

『そうだが……』

『勝手にやるからじつとしててね』

とつてもかつこいい三頭犬のケロちゃん（僕命名）。
なんだかんだ言って僕のいったことに従ってくれました。

魔法で身体と口の中、まるまる全部洗って乾かして、毛並みを整えてキラキラ光るようになる。

見違えるような姿になったケロちゃんは満足そうな顔で僕に言った。

『ジェレミーのおかげで生まれかわったように綺麗になった。この姿で外に出ればモテるだろう。感謝する。その、なんだ、このお礼と言っでは何だがこれからも定期的に洗ってくれるのであれば、何でも言ってくれ。俺のできる限りはしたやろう』

『そうなの？　じゃあ、僕とお友達になってくれる？　たまに来て話しても聞いてくれたら嬉しいんだけど』

『それくらい容易いことだ』

『その時はお友達連れてくるね』

『ああ』

今度くる時はハーマイオニーを誘ってあげよう。

彼女のことだから興味津々でついてくるはずだ。

女の子と2人きりで夜に会うなんてドキドキだけどね。

まあ、こんなことで、僕はケロちゃんと友達になった。

ニバス2000

ケロちゃんとお友達になった次の日の朝、ハーマイオニ？にそのことを報告しに行ったらとても驚いた顔をしたあと、あきれたようなそぶりも見せた。

「ジェレミー、あなたって何者？ 三頭犬と友達だなんてありえないわ。それに、昨日あんなに私に危ないことするなって言っておいて、あなたがしてるじゃないの」

「大丈夫だよ。僕こう見えても強いからさ。それに、ケロちゃんとは本当に友達になれたよ！」

「嘘に決まってるわ」

「嘘じゃないよ！ じゃあ、今から行ってみない？」

「ダメよ。もうすぐ授業じゃない」

「わかったよ……じゃあ、今日の夜でどう？」

「校則違反になるわ」

「もうしてるから大丈夫だよ。11時頃グリフィンドールの寮の前に迎えに行くからね」

「仕方ないわね。行ってあげる」

「ありがとう」

僕らは今日の夜、ケロちゃんに会いに行くことになった。
楽しみだな、なんて考えていると近くから、

「ニンバス2000だつて！ 僕、触ったことさえないよ」

と、ロンのうらやましそうな声が聞こえた。

包みをもっているのはハリー！

念願のおもちやを入れたのかのように満面の笑みだ。

校則違反だろう！

内心そう思った。

しかし、どうせ先生には許可の連絡がいつているとも思う。

2人は急いで箒を見ようと、大広間から出て行く。

僕たちもついて行くように大広間をでる。

そこでは、マルフォイとハリーが口論をしていた。

「箒だ。今度こそおしまいだな、ポッター。1年生は箒をもっちゃいけないんだ」

まさしく正論だった。

けれど、フリットウィック先生の登場により彼は正しくなくなる。
特別には常識は当てはまらない。

「君たち言い争いじゃないだろうね？」

「先生、ポッターの所に箒が送られてきたんですよ」

わざとらしく言うマルフォイ。

「いやー、いやー、そうらしいね」

先生はハリーに笑いかける。

「マクゴナガル先生が特別措置について話してくれたよ。ところでポッター、箒は何型かね？」

「ニンバス2000です。実は、マルフォイのおかげでかって頂きました」

ダドリーが昔僕に向けていた笑みと同じ顔をしてマルフォイに言う。怒りと当惑をむき出しにした顔をする。

当たり前の反応だ。

自分が正しい、この場合はたいていの生徒がそう思うことを、否定されたのだ。

自信たっぷりと言っていれば、なおさらそうなる。

だから、マルフォイはそそくさと逃げるようにその場をあとにした。

その姿を見るハリーとロンの必死に笑いをこらえる所を見ると、カチンとくる。

「だって本当だもの。もしマルフォイがネビルの思い出し玉をかすめてなかったら、僕はチームに入れなかったし」

ふざけるな。

マルフォイはかすめたんじゃない。

親切に拾っただけなのに、お前が暴言を吐くからだ。

「それじゃ、校則を破ってご褒美を貰ったと考えているのね」

隣にいるハーマイオニ？が怒った声でいう。

「あれっ、僕たちとは口をきかないんじゃないなかったの？」

とハリー。

「そうだよ。今更変えないでよ。僕たちにとつちゃありがたいんだから」

「早くこいつを連れて行けよ、ジェレミー。こんなやつはお前で十分だ」

ハリーが僕に言ってくる。

言われなくても、そうするよ。

君たちにはハーマイオニ？が友達だなんてもつたいなさ過ぎる。だから、ハーマイオニの手をにぎりその場を離れた。

「気にしない方がいいよ。あの2人なんて最低なことを言うんだ」

「だ、だ、大丈夫よ。気にしてないから。それよりも……て……手を……」

「手がどうした？」

最後の方声が小さくなって聞こえなかった。顔を真っ赤にしている。

どうしたのかな？

さっきまで怒ってたのに……。

「何でもないわ。そろそろいかないと授業に遅れちゃうから行くわ。11時頃寮の前で待ってるからね」

「わかったよ。また何かあったら僕に言ってね。相談ならいつだって乗るからさ」

「ありがとう」

僕らは互いの授業の受ける教室へと歩き始める。

高鳴る胸が今か今かと夜を望む。

今日は楽しくなりそうだと思った。

夜のデート

約束通り１１時少し前にいつもと同じように口笛を鳴らし、寮をでる。

歩くスピードがいつもより速い。

かつて知ったるホグワーツの中でも、お母さんの寮だったホグワーツの寮まででまようことなどない。

ただ、速く行きたいと焦りながらもハーマイオニーに顔を合わせるのだから平常を保とうと頑張る。

どうにもならないけど。

そして１１時になると同時に、寮の前につく。

そこにはハーマイオニー？が扉の外に出ていた。

「こんばんは」

「こんばんは」

口笛を止め、足音で気配を消す。

「じゃあ、いこっか」

「そうね。校則を破るなんてありえないけど、あなたのやっていることの方がありえないわ。だから、私が見極めるの」

「べつにそういうのは何でもいいけど、ケロちゃんは可愛いよ」

「そ、そうなの。速く行きましょう。こんな所にいたらフィルチさ

んに見つかっちゃう」

「それはありえないから安心して。でも、速く行かないと、ケロちゃんと話す時間がなくなっちゃうね」

暗い中スタスタ歩く僕の後ろで控えめに必死になっではぐれないように、ロープの裾をギュツとつまむハーマイオニー。

彼女に会わせるように歩く早さを変えながら、安心させる口笛を吹く。

ゆっくり歩いたので、5分ほどかかったがようやく立ち入り禁止区域のケロちゃんの部屋についた。

ドアの鍵を呪文で開け、

『こんばんは、ケロちゃん。友だちを連れてきたよ』

『良く来たな。この子は……前来たこともあるな』

「前に来たことあるのハーマイオニー？」

「え、ええ。ちょっと間違えて入ってしまったわ」

『そうみたいだね。まあ、偶然っばいから許してあげてね』

『お前が言うのだから、許そう。べつに何もしていなかったからな』

「良かったね、ハーマイオニー。許してくれるって」

「そ、そ、そう。ジェレミー、あなたってもしかしてこの三頭犬と話してるの？」

「そうだよ。『ケロちゃん、彼女のしゃべってる言葉しゃべれる？』」

「ああ。これで良いか？」

「これで良いよね？ ハーマイオニー」

「ええ。は、初めまして、ハーマイオニー・グレンジャーです。どうかよろしくお願いします」

「礼儀正しい子だな。悪そうな気配はしない。ただ、好奇心が少し強いみたいだな。まあ、良い」

「ありがとうございます」

「そんなにかしこまる必要なんてないよ。ケロちゃんも堅苦しいの嫌いじゃない？」

「そうだな。ハーマイオニーとやら、ジェレミーとおなじように接しろ」

「はい」

彼女の顔はこわばったままだった。

けれど、少しは落ち着いたのであろう。

三頭犬がこうしてしゃべれるなんて知らなかっただろうし、好意的だ。

僕もしゃべれるなんて知らなかったけど、ハーマイオニ？がケロちゃんに気に入られてよかった。

1時間ほど、ハーマイオニ？が質問をして、ケロちゃんが答えるというのが続いた。

その後は、ケロちゃんの背中に乗ったり、ブラシで毛並みを整えたりそんな感じで時間は流れて行く。

その中で、ハーマイオニ？ともっと仲良くなれた。

「マイ」と少し変わっているが、彼女のことを呼ぶことになったのだ。逆に彼女は「レミー」と僕を呼ぶようになった。いわゆる愛称。

まあ、ケロちゃんは、ケロちゃんのままだけど。

とっても有意義な時間だったと思う。

1時を過ぎた頃彼女のあくびが多くなりはじめたので、ケロちゃんとお別れをして、寮に送って行った。

「今日は貴重な体験だったわ。私の知ってた本の世界って狭いのね。このままレミーとケロちゃんに会わなければ頭でっかちになってたと思うわ。ありがとう」

そういつて、彼女は寮に戻った。

僕も寮に戻る。

そろそろ、修行も大詰めだな。

頑張らないと思う。

でも、彼女の笑顔は最高だったな。

さっきの彼女のありがとうと笑顔は彼の脳内に一生忘れることなく
刻まれた。

ハロウィン

月日が過ぎて行くのは早い。

やっとのことで曲弦師と音使いを修めたと思うと、学校はハロウィン一色だ。

授業の始まる前のクラスは、ハロウィンをどう過ごすかだったり、夕食がどんなものがでるかで盛り上がっていた。

僕はそんなこともなく、たまにマイと話したり、ケロちゃんに会いに行ったり、魔法の練習したり、修行したりと、忙しくてそんなことを考える暇すらなかった。

彼女も、勉強勉強で忙しくて朝話した時まで完全に忘れてたという。似た者同士だ。

それに、僕にとってハロウィンは楽しい行事ではない。

いつもごちそうがでていたが、僕が食べるのは余り物。

暴食のダドリーがほとんど食べてしまうので残ってるのはダドリーの嫌いなものだけ。

ハリーも、同じようなものだ。

だから、僕はいつも1人最後の残飯処理。

普通の日の方がよっぽどましなご飯を食べられた。

そんな感じでハロウィンといえば残飯だ。

それををマイに話すと、目に少し涙を浮かべながら「あなたも大変だったのね」と言われた。

だから、「大変だったよ。でも、もう戻る必要はないんだ。休みの期間でも漏れ鍋に泊まるから大丈夫だよ」と返す。

「もし良かったら、私の家に遊びにこない？ お金だってかかるでしょう？」

と、心配してくれた。

感謝感激。

友だちっていいものだな……と改めて感じた。

それはとにかく、今日の前にはこれでもかといわんばかりに贅沢に並べられた料理の数々。

魔法の演出も加わり、歓声が沸く。

こうして楽しい宴が始まった。

僕は、思う存分皿に好きなものをのせながら、隣の席のマルフォイや、他のことしゃべりながら食べる。

よく食べ、よく飲み、よく笑う。

その三拍子があると、時間はすぐに過ぎて行く。
けれど、

「トロールが……地下室に……お知らせしなくてはと思って」

と、クイレル先生が全速力で部屋に駆け込みながらダンブルドアに言う。

ターバンはゆがみ、顔は恐怖で引きつっている。

クイレル先生は、あえぎあえぎ言い終わると、その場でぱたりと気を失ってしまった。

その瞬間楽しかった宴の席は大混乱。

ダンブルドア先生が杖の先から紫色の爆竹を何度か爆発させて、やっと静かにさせた。

けれど、その間にスネイプ先生が扉をでて走っていく。
どこにいくの!?

そう重い、糸を使いあとをつける。

「監督生よ」

重々しいダンブルドア先生の声が轟く。

「すぐさま自分の寮に引率して寮に帰るように」

どうということ？

急展開に少し戸惑う。

先生は出て行って、トロールはでてる。

よくわからない。

でも……先生がケロちゃんの部屋に入った！

『ケロちゃん、その人に何もしないで！』

糸電話の要領でケロちゃんに言う。

『……………すまん。足を噛んでしまった。ジェレミーの連絡でとつさに弱めたから傷は深くないはずだ』

『ありがとう』

監督生に連れられるフリをして、先生の所に走る。

いつものように気付かれないように口笛を吹く。

そして、呼吸音で身体能力を上昇するようにリズムを刻む。

限界から解放された僕の筋肉はきしみながらも通常の早さを超える。

1分とかからずにケロちゃんの部屋につく。
そこでは足を血まみれにしながら座る先生がいた。

「大丈夫ですか！？ 今治すんでおとなしくしていてください」

そういつて、ローブのポケットの中から小瓶を取り出す。

この中には、アウリアの涙が入っている。

それを数的傷口にたらず。

そうすると見る見るうちに治る。

「ありがとう。ジェレミー。だがここは危ない。三頭犬がまた襲ってくるかも知れん」

「大丈夫ですよ先生。ケロちゃんは友だちだから。そうだよね？」

「そうだな。すまんジェレミーの友だちとは知らなかったもんで」

「……………」

ケロちゃんがしゃべれるなんて思ってなかったようで言葉を失っている。

「じゃあ、先生を連れて行くね。騒がしてごめん」

「べつによい。ただ、先ほどハーブを引きながら入ってきたやつがおった。そのせいで眠ってしまったが、臭い匂いがした。もしかしたら危険なやつかもしれん。気をつける」

「ありがとう」

そういつて、先生をつれて外に出る。
何か言いたそうな顔をしているが、

「ジェレミー、助かった。今のは何だ？ と聞きたいがとりあえず
今は寮に戻れ。また明日、放課後私の部屋に來い」

「はい」

寮に向かって僕は歩き出した。

トロール 前編

「どこ行つたのよ、レミーは！？ いきなり消えたからケロちゃんに会いに行つた時と同じようにしたんだと思うけど……」

私ハーマイオニー・グレンジャーは女子トイレにいる。
レミーがいなくなって探していたら、ちよつとね。

どこかにまだトロールがいるかもしれないって言つのに、1人で行動するなんて前の私だったら考えられなかったわ。
レミーといると常識がことごとく壊されるからかな。
それでも、人気のない所で1人でいるの心もとない。

全部レミーのせいなんだから！

言つてて思うけど理不尽な言い草よね。
それでも、少しは責任があると思うわ。
私を心配させるなんて。

——ズーン、ズーン

なに！？

もしかしてトロールの足音？
少しずつ大きくなってる。
ど、ど、どうしたらいいの。

レミー助けに来て！

………そう思っても都合良くくるわけがない。
わかってるけど——レミーなら。
淡い期待をしてしまう。

もうこっちに来る！

そう思った瞬間、扉がギギーと開き自分の3倍ほどの身長をしたトロールが立っていた。

「きゃあああああああああああああああああああああ」

今までで一番大きな声で叫んだ。
ケロちゃんを見たときより大きかっただろう。

そして、何よりそれから驚いたのは息が切れ悲鳴が出せなくなった刹那、トロールが細切れになったからだ。

——シュー

「え！？」

間抜けな声を出し、腰を抜かしてしまった。
トロールの血が私にかかったためだろう。
いくつもの腕や足だった部分がゴロゴロと転がっている。

「大丈夫、マイ？」

ただ座り尽くしている私に声をかけてくるのはレミーだった。
助けて欲しいと願った相手。
ギリギリの所で助けてくれた。

話しの中の白馬に乗った騎士のようなタイミングで、でも、周りが血で染まり本人さえいないというのは……。

「聞こえてる？」

「え、ええ。大丈夫よ。目の前でいきなりトロールが細切れになっただけだ」

「僕がやったよ。今スネイプ先生を運び終わった所。急いで行くからまってね」

胸を撫で下ろす。

これでひとまず安心だね。

誰かがこっちに走ってくる。
たぶんレミーだね。

「……………ハーマイオニー、何があったの？」

そういつて入って来たのはポッターと、ウィーズリーだった。
一言も口をきかないと誓った2人だった……………。

トロール 前編（後書き）

今回、いつもよりさらに短くてすみません。

トロール 後編

「あなたたちに言うことなんて何もないわ。この光景見ていてわからないの？ トロールが細切れになって死んでるの。何を思ってたあなたが来たかは知らないけど、良かったわね。トロールが生きていなくて」

「君がやったの？」

「そんなわけじゃない。私の知っている魔法にこんなのはないわ」

「じゃあ、だれが？」

「……知らないわよ。それよりも早く出て行った方がいいわよ。もうすぐで先生が来るはずだから」

「君はどうするの？」

「私は残るわよ。じゃないと先生たちが困るじゃない」

「じゃあ一緒に残るよ」

「べつにいいわ。帰ってくれないと寮の点数も減点されるし」

「でも！」

うざい。

なんでいいって言うてるのに帰ってくれないの。

あんたたちが抜け出したのがばれたら、寮の点数が引かれるのよ。
私の場合は、目的があつたけど、あなたたちにはないはずでしょ？
あつたとしてもしょうもない理由に決まってるわ。

早く迎えにきてくれないかな、レミィ。

その刹那、1人の生徒が入ってくる。

それも、街の中の車くらいのスピードで。

私たちとは違う、ローブの少年。

特徴的な赤毛の彼^{レミィ}。

「大丈夫、マイ？」

「大丈夫よ」

「この2人はなんでここにいるの？」

「おい、兄に向けてその態度は何だよ。お前こそなんでここに来たんだよ！」

「そんなの決まってるじゃん。マイが心配だからだよ」

「ふんっ！ 生意気な。お前はこのトロールとあつたら倒せたって言つのか？ 俺にも無理なんだ。お前にできるはずないだろう」

「え？ 倒せないの？」

「何だよ！ その自分は倒せますって顔は！」

「実際僕、倒したから。そこにいるの僕がやったから」

「どうやったんだよ！」

「企業秘密」

「ふざけんなよ！」

レミー、やり過ぎ……じゃないね。
こいつ等なんかどうでもいいわ。
偉そうなやつなんて嫌い。

シーカーになったからってちやほやされてたから、浮かれてるんじゃないの？
たぶん、レミーの方がすごいわ。

だって私だって知らない魔法ができるし、ケロちゃんと友だちだし。
いまさっきだって、私をトロールから守ってくれた。

あなたが勝てる要素なんて1つもないわ。

「一体全体あなた方はどういふつもりですか」

凜とした声が突然響く。

そこにはマクゴナガル先生と、スネイプ先生、クィレル先生がいた。
「殺されなかったのは運がよかった。でも、なんで死んでるんですか！？ トロールですよ」

「マクゴナガル先生、これは僕がやりました。マイ、ハーマイオニ？ が危ないと知ったので、スネイプ先生に許可を貰ってきました」

「そうだミネルバ、ジェレミーに関しては吾輩が許可を出した」

「あなたは教師でしょが！ 何故生徒を危ない所に送り込んだのですか！」

「私はけがをしている。そのとき助けくれたのもジェレミーだった。だから、許可した。ジェレミーであれば心配ないと」

「……………わかりました。ジェレミー・ポッターはあなたの寮の生徒ですからね」

「ありがとうございます」

「ポッター、ウィーズリー、グレンジャーはどうしてここにいます」

「私は、ジェレミーが列から抜けて行くのを見て危ないかもと後をおいしました。その結果こう言うことになったのは私の間違えでした。すみません」

「グレンジャー、あなたは賢い子です。今後はこう言ったことはないようにしなさい。罰則は後で言います。後、グリフィンドールの5点減点です」

「はい」

「僕たちはハーマイオニ？が心配できました」

「そうですか。あなたたちも、後で罰則です。それにグリフィンドールからは10点減点」

「なんでジェレミーだけ何も無いんですか!？」

「彼がスリザリンだからです。私ではなく、セブルスが決めることです」

「チッ」

「けれど、セブルスとジェレミー・ポッターは校長室にきなさい」

「はい」

私は寮に戻る前に、浴場に行き血を洗い流す。
そうしないと寮の人が驚くから。

大丈夫かな？

校長室なんて……。

まあ、レミーだから大丈夫かな。

ダンブルドア校長

以前来たことのある、校長室。

今回はスネイプ先生だけでなく、マクゴナガル先生、クイレル先生もいる。

マクゴナガル先生は僕のことを睨んでいる。

なんで？

僕悪いことしてないけどな。

クイレル先生はおどおどしているだけだし、臭いし、気持ちわるい。スネイプ先生はダンブルドア校長をじっと見ている。

ダンブルドア校長は何か思案するようにひげを撫でる。

けれど、その眼鏡を通した眼孔の先には僕を見ていた。

「今回のことじゃが、トロールが逃げ出したのは我々に手落ちじゃった。けれど、何故そのトロールがあのような姿になっておったか知りたいのじゃ」

「これは他言無用でお願いします。僕の技能に曲弦師というのがあり、それは糸を操るというものです」

「ほう。マグルの技術かろう？」

「わかりません。けれど、これは魔法使いに取って相性の良いものではありません。例えば決闘をするとしましょう。杖を降る瞬間、糸で杖を切ればそれで負けは決定します」

「熟練したものでか？」

「はい。見えないほど細い糸で始まる前から巻き付けていければ良い

のです。その後呪文を決めれば、簡単に勝てます」

「そうか……………」

「それで今回は、校舎内に糸を巡らせトロールの場所を探し、切りました」

「探知も可能なのか？」

「はい。糸に触れるものでだいたいわかります」

「どこでそれを覚えたのじゃ？」

「それは……………」

「言いにくいのかな。ならば今は聞かずにいよう。そのかわりこれは今度から使うではないぞ」

「何故ですか？ これは僕の技術です。僕だけのものです。あなたに制限される覚えはありません」

「それでもじゃ。これが他の魔法使いにばれたら殺されるかもしれないぞ」

「いえ、大丈夫です。それくらいならば1秒とかからず倒せますから」

「どうしてもか？」

「どうしてもです」

「ならば良い。だがくれぐれも人を殺すようなまねはするな」

「当たり前ですよ。やるとしても杖を壊すだけです」

「では、トロールの件だが、生徒に危険が迫っていたためしかたなく使ったということで良いか？」

「そうです。系ではトロールの近くにハーマイオニーがいたので危険だと判断して殺しました」

「そうか。他の先生にはこのことは伏せておこう。混乱を招きかねん」

「ありがとうございます」

「ただこれは公にできんが、教師がつくまえに友だちを勇敢にも倒したというのは1年生では間違えなくできんことじゃ。それで、寮の点数はやれんが何か望みはあるか？ できる限り叶えよう」

「だったら、僕にも……いや、1年生にクイディッチができるようにしてください。試験は受けます。ダメでしょうか？」

「今年からは無理じゃが、来年からはできるようにしてみよう。多少条件は厳しくなるが。セブルス、ジェレミー・ポッターを寮のチームで臨時の試験を受けさせてみよ」

「わかりました」

「ありがとうございます」

マクゴナガル先生は涼しい顔をしている。

ハリーで勝てると思っっているからだろうか？

ありえないよ。

ハリーより練習してる僕だし、才能だつて上だよ。

他を知らないから、あんまり大きなこと言えないけど上級生には負けないくらいだ。

まあ、だからもうすぐあるクイディッチの試合で目にも見せてやる。

それにしても、前の時はダメだったけど、力があるとわかったら参加させるんだね。

ハリー以外の例外も作りたかったようだね。

でも、来年から１年生ができるといっても選抜試験で落ちるだろうけど。

まずは、このことマイに報告しなきゃ！

スリザリン対グリフィンドール

11月に入ると、とても寒くなった。

学校を囲む山々は灰色に凍り付き、湖は冷たい鋼のように張りつめていた。

校庭には毎朝霜が降りた。

窓から見下ろすクイディッチの競技場は飛ぶのもはばかれそうなくらい冷えきっていた。

クイディッチ・シーズンの到来だ。

オーディションは今までで史上最高の成績を収め、チームとの連携などを練習した。

土曜日はいよいよ初試合だ。

スリザリン対グリフィンドール。

ハリーがシーカーをしているともっぱらの噂だ。

僕は、スリザリンの秘密兵器で誰にもばれていない。

まあ、マイは例外だけど。

前までのシーカー対策をしてある向うには申し訳ないが、意味がない。

それに、僕の場合練習で、最速で1分、最長でも30分だ。

これは過去最高速だといっても過言ではないそうだ。

さらには、箒も借り物でニンバス2000と比べれば7割の速さしかでない。

それでも結果がついてきているのは実力があるからだ。

11時には学校中がクイディッチの競技場の観客席に詰めかけてい

た。

双眼鏡をもった生徒もたくさんいる。観客席は空中高く設けられていたが、それでも試合の動きがみにくいこともあるそうだった。

マイは寮的にはグリフィンドールを応援するそうだが、僕個人は別にして応援するみたいだ。

だから、朝食を食べ終わり用意をに行く前には「絶対かってくる」といつてきた。

更衣室でクイディッチよりの緑色のローブに着替えて、大歓声に迎えられグラウンドにでた。

僕がいることに競技場全体が驚いていたが関係ない。

僕は僕のできること、仕事をするだけ。

箒を手に競技場の真ん中に立ち、糸を展開する。

刹那の速さでスニッチの場所を特定する。

「さあ、皆さん、正々堂々戦いましょう」

選手が周りに集まるのを待って、審判のフーチ先生が言う。

何故か内のキャプテンにいつているような感じだったが気にしない。

なぜなら今回はそんな暇さえ与えないのだ。

速攻で僕がスニッチをとる。

ただそれだけ。

それまでにできるだけ得点を稼ぐ。

というのもあるにはあるが、僕が取ることが一番重要だ。

ふと目に入る、「ポッターを大統領に」の旗がうざい。
それを見て、興奮しているハリーはもつとうざい。

だけど、気にしない。

これに勝つのに、そんなことは必要ない。

「よい、箒に乗って――」

銀の笛の高らかな音とともに、空へ舞い上がる。

糸はその瞬間回収する。

試合中の使用は反則だからだ。

けれど、僕には場所がわかる。

羽音がするのだ。

その方向へ向かい飛べばいい。

だから、何も気にすることなく箒を一直線に飛ばす。

「さて、クアッフルはたちまちグリフィンドールのアンジェリーナ・
ジョンソンが取りました――なんてすばらしいチェイサーでしょう。
その上魅力的であります」

轟々な実況だ。

こんなの聞きたくない。

だから、もつともつと加速する。

その間に横をブラッジャーが一瞬かすめるが、よける。

見えた！

金色の閃光がぐるぐると回っていた。

急加速をする。

そんな僕につられて気付いたのかハリーもスニッチを見つける。

けれど、僕の方が近い。

そして速い。

手を伸ばしながら——金色の閃光をつかみ取る。

開始5分。

魔法学校記録最速で初試合を終わらせた。

ホイッスルとともに試合終了だ。

けれど、グリフィンドールの選手は何があつたか理解できてなさそうだった。

開始5分で終わるクイディッチはしらないそうだ。

でも、勝ち勝ち。

150対0。

まさに圧勝だった。

閑話 ある冬の日1（前書き）

閑話ということで短くなっています。

閑話 ある冬の日1

クイディッチの試合も終わり、興奮と、喜びは1ヶ月さめやまなかった。

けれど、もうすぐクリスマス。

12月も半ばにもなると、ホグワーツは深い雪に覆われ、湖はカチコチに凍り付いていた。

そんな中僕の頭の中を閉めていたのは、クリスマス休暇だ。

今まで忙しくて、外の森など探検にいけなかったのをすまそうと思う。

アウリアを抱いて行けばあったかいだろう。

けれど今はこの寒さが問題だ。

スネイプ先生の地下牢教室は、吐く息が白い霧のように立ち上がり、生徒たちはできるだけ熱いかまに近づいて暖をとる。

「かわいそうに」

魔法薬の授業の時、久々にマルフォイがハリーにちょっかいを出しに行っている。

「家に帰るなといわれて、クリスマスなのにホグワーツに居残る子がいるんだね」

僕は自分の意志でここにいるので関係ない。

でも、僕以上に可愛がられていたのに帰ってくるなといわれたハリー的心中は察しがない。

だぶん、お金がかかるとか戻ってくるのは一回でいいとかそんな所だろう。

無視する、ハリーの顔は赤くなり今にも叫びたそうだったが授業中、しかもハリーの苦手とするスネイプ先生の授業だから我慢しているのだ。

なんか情けない……。

その中、マイは実家に帰るみたいだった。
何か寂しくなる。

でも、アウリアを使って手紙は毎日やり取りすることが決まっているので安心だ。

安心？

何だろう……この気持ち。

離れると寂しくなって、近づくと温かくなって。

僕はこの気持ちの正体知らない。

でも、マイも同じように感じてくれたら嬉しいな。

閑話 ある冬の日2（前書き）

また短いですが、これからもよろしくお願いします。

閑話 ある冬の日2

ある日、クリスマスの休日を利用して禁じられた森へと行った。いつものようにすれば誰にもばれない。

少しばかり奥に入ると動物の鳴き声が大きく聞こえるようになってきた。

ここのはケンタウロスやユニコーン、セストラルがいるしそうだ。

そこで、気配を現して口笛を吹く。

ピューと甲高い音とともに森が風で揺れる。

どこの方向からも多くの生物がこちらに起きているのがわかる。

「動くな！」

まず来たのはケンタウロスたちみたいだ。

その次にユニコーン。

セストラル。

クモ。

などなど。

周りをざっと囲まれてしまった。

まあ、その分系を張り巡らしているし、音で心もつかんでいる。

それに、そもそも襲うような雰囲気を出していない。

「やあ。僕はジェレミー・ポッター。みんなと友だちになりに来ただけ、いいかな？」

「それだけのためにこんな危ない所に来たのか？」

「そうだよ」

ケンタウロスは心配してくれるみたいだ。

「それより、あなたのお名前は？」

「わ、私か？」

「そう」

「私はシュバルツだ」

「よろしくね。……………それで、周りの子たちもいいかな？」

そういつて周りを見回すと始めにあった少しの警戒もとけ、親しく接しようとする意思が伝わってきた。

「みんな、ありがとう。じゃあ、僕のお友達を紹介するね。不死鳥のアウリアと、白面金毛九尾の狐のニーナちゃんだよ」

そういつて抱いていたアウリアとペンダントに住んでいたニーナをみんなの前に出す。

「オー、これは珍しい。不死鳥に東方の有名な狐ではないか」

「そう？ この子たち可愛いけどそんなに珍しいなんて思わなかったよ」

「たまにくるハグリットが言っておったぞ」

「へー」

驚きの事実発覚。

必要の部屋の中で呼んだ時はそんなこと一言も言ってくれなかったからな。

でも、なんとなくこのもふもふなしっぱはただ者じゃないとは思ってたけど。

それから、みんなと夕飯で戻る時まで話した。

みんな個性的で面白かったし、僕の知らないことをいっぱい知ってたから教わった。

これからもたまに行く約束をして帰る。

こんな休日の過ごし方も悪くない。

ケロちゃんの守るもの

「マイ、久しぶりだね」

「そうね。私からのプレゼントしっかり届いたかしら？」

「届いたよ。ありがとう。僕からののは？」

「アウリアがしっかりもってきてくれたわ。とっても高そうなペンダントだったけどいいの？」

「それはね、クリスマス休暇中に行った森でアクロマンチュラの子供にあつて、毒をわけてもらったんだ。それを売ったら結構貰えてね」

「そ、そうなの……」

「どうしたの？ 何かダメなことしたかな？」

「違うわ。ケロちゃんの時もそうだけど、あなたって動物にすかれやすいのね。それも、ありえないのに」

「そうだね。森の中でも友だちがいっぱいできたから。アクロマンチュラ、アクラちゃんの親御さんはアラゴクって言うみたいで、良くハグリットって名前の人のことを話してくれるらしいよ」

「ハグリット……。いつか危険なことするんじゃないかって思ってたけど、もうしてただなんて」

「大丈夫だよ。たぶん知ってる人も少ないはずだし」

「そうね」

ちょうどクリスマス休暇も終わり、マイが帰ってきたのでケロちゃんの所に向かっている。

クリスマスにはプレゼントを送っていた。

ペンダントだけど、ダイアゴン横町に行ってかっってきたものだ。

アウリアを使えばすぐだったしばれてないはず。

一番マイに似合いそうなやつを値段も見ないで買ったから、高くてびっくりした。

でも、アクラちゃんのおかげで大丈夫だったし、マイに喜んでもらえて何よりだ。

マイからは虫歯になりにくいようにできている飴と本をくれた。

本は『吟遊詩人ビードルの物語』だった。

マルフォイと前話していたときにこれの話を聞いて、読んでいないなら読んだらいいよとお勧めされたので読んでみたいなとマイに話したことがあった。

それを覚えていてくれたようだ。

そうこうしているうちにケロちゃんの部屋につく。

「ひさしぶり！」

「久しぶりだな、ジェレミー、ハーマイオニー」

「久しぶり、ケロちゃん」

「今日はどうした？」

「いや、ちょうど休暇も終わってマイが帰ってきたから来ただけ」

「そうか」

「マイはいつものように聞きたいこともあるの？」

「あるわよ」

「なんだ？」

「いつも気になってたんだけど、足下の雇って何？」

「気付いていたのか！」

顔が3つ一瞬にして驚いた表情になるから思わず吹いてしまう。

「レミーのことはほっておいて、もしかしてスネイプ先生が前来たとき噛みついたのに関係あるわけ？」

「そうだ。ハグリットに賢者の石を守るために連れてこられた。べつに飯もしつかりでるから文句はないんだが、如何せんここは狭くていやになる」

「そうよね。あなたの身体に対してこの部屋は狭いわね……………つて、違うわ！　今賢者の石って言った？」

「言ったぞ。何でもダンブルドア先生の友人から預かってるそうだ」

「この扉のなかって私たちで入れないの？」

「入れるぞ。ただ、この扉の後にもしかけがしてあるそうだから、危ないかもしれん。まあ、欲しくもないならいい方がいい」

「ケロちゃん、マイ、僕欲しい。賢者の石ってどんなのを見てみた
いんだけど」

「何言ってるの、レミー？ さっきの話聞いていたでしょう？
危ないのよ」

「僕たちなら大丈夫だよ。ケロちゃん、もし僕たちがいくときは行
かせてね」

「了解した」

マイがやれやれといった感じで手を頭に当てながら僕を見ている。
まあ、いつものことだからいいよね？

こんなことがあり、マイと僕は1週間後に行く約束をした。

スネイプ先生には話しておいた方がいいかな？

まあ、とりあえず行く準備をしとかないと！

賢者の石攻略 前編

丁度1週間、僕たちは賢者の石を見に行くための準備に明け暮れた。何か役に立ちそうな薬品がないかと考え、できるだけ作り、マイは罫について考え対抗策を練った。

僕の力があればたいていは乗り越えられるだろうと思うけど用心は必要だ。

マイが言うには先生一人ひとりによって罫が仕掛けられているそう
だ。

だから、スネイプ先生やマクゴナガル先生、ダンブルドア校長先生の罫もあるということになる。

たぶんどれも、魔法使いらしいものなのだろう。

たいていは糸で切れば解決できるという、裏技が僕にはあるがそれは想定外だろう。

力技なんて魔法使いがしなさそうな手法だ。

僕らはいつもの時間にグリフィンボール寮の前で待ち合わせをし、薄暗い廊下を歩く。

靴の音と、僕の口笛。

それだけが響く。

誰にもばれることはない。

そういえば、ハリーも抜け出すことが多くなったみたいで困っている
と聞いていたな。

誰からかわからないけど、透明マントが送られてきたそうさ。

マイの予想では、ダンブルドア先生みたいだ。

まあ、僕らには関係ない。

そんなものがなくても、見えないものは見えなくなるのだ。

そうして、僕らは今冒険にでる。

「ケロちゃん、行ってくるよ」

「行ってくるわね」

「けがなどするでないぞ。あまり心配させるでない」

「わかってるよ。僕たちを誰だと思ってるの？」

「「ケロちゃんの友だちでしょ！」」

僕たちは扉を開け、アウリアの足をつかむ。

その見えないこの先に何が待つというのだろう。

それでも、知的探究心、興味は尽きない。

だから、僕たちは進む。

紅の羽を飛ばたかせて、少しずつ下りて行く。

手の持ったランプの光でそこを照らす。

何かに近づくにつれ、黒いのがはつきりわかる。

とりあえず、１メートルくらい上の所でとまる。

「これなんだと思う?。」

「何かで読んだことあるわ。これは植物よ。そう、『悪魔の罌』!」

「そういえば授業でやったね。スプラウト先生が言うには、暗闇と湿気を好むだったはずだよ」

「じゃあ、あの呪文でいいわね? セーの――」

「「インセンディオ!」!」

杖からでた、炎は『悪魔の罌』を燃やす。

自分たちの通る分だけ燃えると、アウリアが下に下りて行く。

そこには奥へと続く石の一本道があった。

アウリアを肩に乗せたまま、遠足気分歩いて行く。

はつきり言えば、さっきの罌はたいしたことがなかった。

歩くこと3分。

虫の羽音とのようなものが聞こえてくる。

「聞こえてる?。」

「ええ。金属のこすれ合う音みたいだわ。それに羽音も」

進んで行くと通路の出口にでる。

目の前にはまばゆく輝く部屋。

天井は高くアーチ型をしている。

宝石のようにキラキラした無数の小鳥が部屋いっぱい飛び回っていた。

部屋の向こう側には分厚い木の扉がある。

一応糸で鍵がかかってないかを確認する。
そうすると、案の定かかっていた。

「向うの扉は鍵がかかってるみたいだよ」

「やっぱりそうなのね。見て！ あの鳥鍵の形をしているわ。たぶんどれかがあそこの鍵だから」

「ちょっと待ってて」

糸で鍵の穴の形を確認。

そして、鳥の中で同じのがないか確かめる。

何百もいる中でも僕の糸は問題ない。

究極に扱えるように、修行してきた。

曲弦師を極めた僕に不可能はない。

まあ、もっと上があるとは思っけど。

「あつた！ とりあえず、向うの扉の所まで行こう」

「襲ってこないわよね？」

「大丈夫。僕が守るから」

僕は手をつなぎ扉まで走る。

幸運なことに襲ってはこなかった。

糸で目当ての鳥をこちらに引き寄せ、さっと開ける。

その時も襲ってはこなかった。

もしかしたら、部屋の真ん中であつた筈が起動装置だつたのかもしれないな。

次の部屋は真つ暗だったが、僕らが入ると明かりがとる。

そこに広がつたのは、大きなチェス盤だつた……………。

賢者の石攻略 中編

大きなチェス盤の上には、チェスの駒がこちら側に黒、向こう側に白でのっている。

そのテイスの駒は僕らよりも背が高いようだった。

「マイ、これは僕らがチェスをするのかな？」

「そうだと思うわ」

「さっきみたいに向うの扉に行ってみる？」

「止めときましよう。こういうの映画だと攻撃してくるはずだから。それに罠だからたぶん行ったらダメよ」

「そっか。じゃあさっさと終わらせよう」

そういつてナイトの駒まで近づいて行く。そして手で触れるとすぐにどいてくれた。マイも同じようにして、ルークと変わる。

「これって魔法使いのチェスだね？」

「それはそうでしょ」

なら勝てる。

僕がナイトの代わりになるということは全方位を攻撃できる駒になったのと同義だ。

ここからは殲滅戦になる。

白いポーンがふたつ前に進む。
これがチェス開始の合図だ。

自分を前に進めながら、糸を展開。
全部の駒にくくりつける。

「マイ、セーので向うの扉まで走れ！——セーの！」

その掛け声とともに石のくだける音が部屋に響く。

こんなのチェスじゃないかもしれない。

でも、結果としてこの先に進めるんだから問題ない。
そう、問題ないんだ。

そう思いながらも扉に向かって走る。

「開かないわよ、レミー。どうするの！？」

「大丈夫！」

これも糸で切り刻む。

ざく切りにされた扉はあっけなく崩れる。

そしてまた通路にでる。

「レミー、さっきのはずるくない？ あんな力技魔法使いにはできないわ」

「そうかな？ 普通、こんなのまともに相手になんかしらないよ。だって、まだまだ罠があるかもしれないんだよ。こんなのでマイがけ

がなんかしても困るし」

「ありがとう……。それより、今までの罨を考えると、次はクイレル先生かスネイプ先生の罨じゃないかしら？」

「そうかな？ クイレル先生の罨って、前倒したトロールだと思うんだけど。だから、無しなんじゃないかな？」

「それもそうね。じゃあ、スネイプ先生の罨か……」

「大丈夫だよ！ 僕魔法薬学は必死に勉強したから」

「そんな簡単な罨じゃないと思うんだけど。まあ、私がいるから大丈夫ね」

「そうだね！」

そういいながら次の部屋の扉の敷居をまたぐ。そうすると同時に、入り口で火が燃え上がる。ただの火ではない。

紫の炎だった。

同時に前方のドアの入り口にも黒い炎が上がる。

閉じ込められた！

まあ、力技を使えばでれるけど。

「レミー、7つの瓶と羊皮紙があるわ。たぶんこれでいけるわね」

そう言ってマイは羊皮紙を手に読み始める。

「『前には危険 後ろは安全

君が見つけさえすれば 二つが君を救うだろう
別の一つで退却の 道が開ける

その人に 二つの瓶は イラクサ酒

残る三つは殺人者 列にまぎれて隠れてる

長々居たくないならば どれかを選んでみるがいい

君が選ぶのには役に立つ 四つのヒントを差し上げよう

まず第一のヒントだが どんなにずるく隠れても

毒入り便のある場所は いつもイラクサ酒の左

第二のヒントは両端の 二つの瓶は種類が違う

君が前進したいのなら 二つのどちらも友ではない

第三のヒントは見た通り 七つの瓶は大きさが違う

小人も巨人もどちらにも 死の毒薬は入ってない

第四のヒントは双子の薬 ちよつと見た目は違っても

左端からに番目と 右端からに番目の 瓶の中身は同じ味』」

マイはホーツと大きな溜め息をついた。

やっぱり、微笑んでいる。

「すごいわ！ これは魔法じゃなくて理論ね。パズルだわ。大魔法
使いといわれるような人でも、理論のかけらもない人がたくさんい
るのはしてるわね。そういう人はここで永久に行き止まりだわ」

「でも違うんだろう。僕の場合は力技でできるし、考えればわかる
と思うけど、マイにはもうわかってるんだらう？」

「そうよ。いちばん小さな瓶が前に進める。いちばん右端の丸い瓶
のが戻る薬。レミーが小さい瓶のを飲んで」

「いいの？」

「いいわよ。そのかわりしっかりと持ってくるのよ」

「了解！」

賢者の石攻略 後編

どうやらこの部屋が最後みたいだ。

ということは、ダンブルドア校長の仕掛けがあるということだろう。
たぶん、ひっかけ的なもの。

そう思いながら歩いて行く。

中央には、大きな鏡がある。

そこには、『わたしはあなたのかおではなくあなたのこころのぞ
みをうつす』逆さに書いてある。

これはみぞの鏡だ。

いわゆるマジックアイテムの1つだ。

本には、その鏡に映るのは、心から願うものだという。

まあ書いてある通りだ。

では、どうしたらいい？

——心から賢者の石が欲しいと願えばいい。

僕らの願い。

それは、賢者の石を生で見ることに。

そう思い鏡の前に立つ。

そして映るのは僕とマイ。

僕の手の中には賢者の石が。

マイはそれを興味津々で身を乗り出しながら見ている。

どちらも満足した顔だ。

あつ、マイが抱きついてきた。

僕はこんなことを願っているのか……………。

そんなことより手の中を見てみると、賢者の石が収まっていた。

ふと手が重くなったかと思うとあった。

何となくしかけがわかった。

心から賢者の石が欲しいと思って鏡の前に立つことが条件だと思う。後もう1つか2つ、ダンブルドア先生のことだからありそうだけど。

案外楽な冒険だった。

学校の先生の畏もたいしたものじゃないね。

これだったら上級生ならいけるんじゃないかな？

ま、ともかくマイの所に帰ろう。

僕が賢者の石を取ったことで全ての畏が止まったのかわからないけど、さっきまで燃えていたこの部屋の入り口の火は消えていた。

駆け足で、マイの待っているチェスの部屋に急ぐ。

「マイ！ 取ってきたよ！」

「すごいわ！ わたしにも見せて！」

僕らはこの部屋で1時間ほど賢者の石を眺めていた。

そして、上に戻ることにいつもの帰る時間になっていた。

「ケロちゃん、賢者の石ゲットしてきたよ」

「それはすごいな。ハグリットはこれを抜けられるのはダンブルドア先生くらいなもんだとかいってたぞ」

「そんなことないよ。あれだったら結構な人がいけるんじゃないかな？」

「いや、このわたしを超えて行くことがまず無理だな」

「そうだね」

とりあえず、賢者の石は僕が持つておくことになり、マイを寮に送って自分の寮に戻った。

こうして、大冒険は終わったのだ。

翌日は授業をさぼってこれを使って色々研究し、金を作ったりとなかなか楽しかった。

また、その翌日、その翌日と日は経っていったが、賢者の石がなくなったことは学校では噂になっていないようだった。

そんなわけで僕たちが未だ持っている。

命の水など色々作って遊ぶのは楽しい。

こんな子供に使われてていいのかと思ったが、ホグワーツにある時点で大丈夫だろう。

そうそう、僕とマイは付き合い始めたんだ。

賢者の石を見てみるとマイが抱きついてきて、みぞの鏡と同じ状況になった。

だから、大冒険も2人でしたし、この気持ちを今のままにしておく
ことなんてできないから告白すると了承してくれたのだ。

マルフォイにだけ、それを話すと疲れたようなかおをしてお似合い
だよと言ってくれた。

どうしてマルフォイが疲れてるのかな？

—— 休んでた分の書き写したのんでたからか。

マルフォイっていいやつだな。

ありがとう。

ノーバート

賢者の石を取ってきてもうまた幾日も経った。

必要の部屋のことを教え、そこで魔法の練習を一緒にするようになったし、賢者の石の部屋で使った曲弦師と音使い、動物とはなせる能力について詳しく教えた。

マイはマグルの家庭だったからこの技能について不思議になど思っていないかった。

マイも、魔法は便利な道具程度にしか思っていないようで、あれば使うようだ。

車も使えば、箒も使う。

ケースバイケースと言ってたな。

ただ、どこで学んだか気になってたみたいだし、楽器を出せる腕輪にも興味を示していた。

そこら辺は僕もわからないので何とも言えなかったけど。

そんなある日、糸で面白いことがないかと探っているとハグリットの部屋に卵らしきものがあるのを知った。

マイにそのことを伝えると、「じゃあ、会いに行きましょう!」と言われ、これからいくことになった。

ただ、マイの話によると、ハリーたちも行くみたいなので、重ならないように行かなければならない。

だから、マイにアポイントメントを取ってもらい、ハリーたちより先に行けるようになった。

「なんの卵なんだろう?」

「案外ドラゴンじゃないかしら。前から欲しいって言ってたはずだけど」

「そうだね。ドラゴンだったら面白いけど、産まれた後どうするのかな？」

「たぶん考えてないんじゃない？」

「ハグリットだったらありえる」

「その時はあなたが貰ってあげれば？」

「そうだね。僕が貰うんならいつでも会えるし、ハグリットも賛成してくれると思うよ」

「とりあえず、ハグリットに話してみましよう」

こうして、ハグリットの所に行った。

そして、このことを聞いてみると案の定考えていないようで、僕の方で預かるのに賛成してくれた。

でも、飼える時まで飼いたいみたいで、その時が来たらフクロウで知らせると約束してくれた。

肝心の卵だが、とっても大きくてびっくりした。

今まで見たことのある卵なんて、魔法薬学に使うのか、鶏の卵くらいしかない。

それに比べると何倍だろうか？

比べるのもばからしいほど大きかった。

今の状態じゃ、目玉焼きは作れないだろうけど、作ったら1人で食べられるかな？

そのあと、どうやってこの卵を貰ったとかを聞きながらお茶をした。まったりとした時間と魔法生物についてはとても興味深かった。

ただ、貰った経緯がとんでもなく怪しくマイと後で話し合うことをひっそりと決める。

なぜなら、賭けの商品である。

取引禁止が少なからずあるドラゴンの卵をどこでそいつは手に入れたんだ？

それに、知らないやつがハグリットにあげるか？

好事家なら高い値段を出してでも買い取ると思うが。

それで詳しく聞くと、ケロちゃんの攻略方法を話したかもしれないと言っていた。

もしかして、賢者の石を狙って？

マイの方を見ると同じ考えに至っていたようで僕の方に顔を向けていた。

とりあえず、今日の所は帰ることになったが不安だ。

あんな簡単に攻略できる所に何かが取りに入ろうとしているとなると。

まあ、賢者の石はアウリアに持たせてペンダントの中に入れているから見つけるのは不可能なはずなんだけど。

とりあえず、ケロちゃんに注意だけしとかなきゃと思ったのだった。

後日、ハグリットは1週間ほどノーバート、孵ったドラゴンのことを飼ってから僕に連絡をくれ、ペンダントの中に入れてもらった。まあ、そのとき

『わたしはメスよ！ オスの名前なんてつけないで！』

と言ったため、ノーベルタと改めて名前を付けることになったのだ。

盗人

一年生もそろそろ終わろうかという頃、ダンブルドア先生が出張にでていた。

そして、その日を狙いケロちゃんのいる部屋に侵入を試みていたので、僕がすぐにスネイプ先生に連絡する。

すぐに先生は他の先生も集めてその部屋に向かった。

ダンブルドア先生にも連絡はしてある。

5分もすれば戻れるそうなので安心だ。

まずは、侵入者が誰なのか。

それは——クレイル先生だった。

スネイプ先生は前から目を付けていたそうだが、特に今回招集をかけてこなかったこと、僕の糸による情報によるのが決定的となった。

まあ、そんなに慌てる必要なんてないのというのが僕の意見だったが、その部屋に賢者の石がないことを知る人は誰もいないので黙っておく。

今回のことではれるかもしれないが、とりあえず今は。

それに、クレイル先生がマイを襲ったら一大事だ。

一応マイの近くには糸を何本も張り巡らせているので大丈夫だとは思う。

念には念をだ。

順調に解決すると思ったその矢先、思わぬことが起きる。

なんと、ハリーとロンもその部屋に入って行つてたのだった。

ケロちゃんがクレイルの侵入のまま、寝ていたこともあり入れたようだが悪魔の罠に引つかかつており重傷を負っていた。

そのせいで先生たちが大慌て。

スネイプ先生だけが冷静に奥の部屋まで行つた。

そして、そこにいたのは『例のあの人』だ。

ただ、その身体は弱り切っておりクレイル先生に憑依することや、ユニコーンの血を飲むことで生きながらえている何とも滑稽な姿だった。

それを見た、先生は慌てに慌てたが、その態度是一片たりとも見せず賢者の石を取り出す手伝いをした。

もうすぐダンブルドア先生が知っていたから、信じていたからの行動だ。

取り出そうとする寸前、表れたダンブルドアにより『例のあの人』は逃げざる終えなかった。

弱体化した身体では殺されることがわかつていたのだろう。

また、ダンブルドアも捕らえられなかったのはそれだけ『例のあの人』が強い証拠なのだろう。

僕なら霊体であつても音でだったらなんとかできる気がするけど。

こうして、事件は幕を閉じた。

余談だが、ハリーとロンは数日後には治りマクゴナガル先生の5時間の説教と罰則をつけることになる。

そして、明日がホグワーツの終業式。

マイの家にいく約束はもうしてあるし、マイの両親にも手紙を送っている。

そう、僕らはもう両親に認められていた。

ダーズリー家が戸籍上の親になっていたがつい先日このことをスネイク先生に相談しに行くと、里親になってくれることになり、このような結果になった。

先生はスリザリンの先生だが、べつにマグルとか純潔だとかで人を見ない。

それは、お母さんに関係しているとは思うけど詳しくは知らない。

「彼女を大切にしろ」

と帰るとき一言だけくれた先生の姿は哀愁が感じられた。

あとマルフォイにも家に誘われていたが、今回は丁重に断らせてもらった。

なぜならマイと過ごす時間が減るからだった。

まあ、今から予定を立てれば、来年は行けるだろうということでも来年少お邪魔することは決定している。

そうそう、賢者の石だが盗まれはクレイル元先生に盗まれはしなかったがなかったことをダンブルドア先生に気付かれた。

ただ、誰が盗んだかまではわかっておらず、目下捜索中だ。

先生たちが必死になって探しているので今は名乗りだせずにいる。だから、少し落ち着いた頃にこっそり戻しておこう。

マイもそれには賛成だったようだ。

学年度末パーティー

今日は学年度末のパーティーだ。

大広間は7年連続で寮対抗杯を獲得したお祝いに、グリーンとシルバーのスリザリン・カラーで飾られている。

スリザリンのヘビを書いた巨大な横断幕が、ハイテーブルの後ろの壁を覆っていた。

ラッキーなことに今日退院してきたハリーとロンの2人がおくれで広間に入ってくるとあたりはシーンとなる。

この2人が何をしようとしたのかは先生からは何も語られていないけれど、噂というのはすごいもので誰が流したかもしれない馬鹿なことをやったというのはみんなが知っていた。

そして、次に表れたのはダンブルドア先生だ。

「また1年が過ぎた！一同かぶりつく前に、老いぼれの戯言をお聞き願おう。なんと言う1年だったろう。君たちの頭も以前に比べて少し何かが詰まっておれば言いのじゃが……新学年を迎える前に君たちの頭が綺麗さっぱり空っぽになる夏休みがやってくる。

それではここで寮対抗杯の表彰を行うことになってとる。点数は次の通りじゃ。

4位	グリフィンドール	262点
3位	ハッフルパフ	318点
2位	レイブンクロー	389点
1位	スリザリン	513点

となっておる」

僕にテーブルは嵐のような歓声と足を踏み鳴らす音が上がる。

マルフォイとゴブレットをならしたり、まわりに負けじと声を出す。

「よし、よし、スリザリン。良くやった。しかし、つい最近の出来事も勘定に入れねばなるまい」

部屋全体がシーンとなった。

スリザリン寮生の笑いが少し消える。

「えへん」

ダンブルドアが咳払いをする。

「駆け込みの点数をいくつか与えよう。Aと、そうそう……まず最初は、ロナルド・ウィーズリー君」

ロンの顔がお赤くなる。

まるで日焼けした赤かぶれのようなのだ。

「この何年間かでまれに見る勇気をだしてくれたことにより30点」

グリフィンドールの歓声は天井を吹き飛ばしかねないくらいだ。

「次にハリー・ポッター君……。ウィーズリー君と同じようにここ近年まれなる勇気を見せてくれたことをたたえ30点。

また、勇気にも色々ある。敵に立ち向かって行くにも大いなる勇気がある。しかし、味方の友人に立ち向かうためには同じくらいの勇気が必要じゃ。そこで、ネビル・ロングボトム君に20点」

これで、80点追加され3位に上がる。

ただ、1位がスリザリンでなくなるわけではないし、ましてやグリ

フィンドールが万年4位な訳ではない。

「しかしじゃ、ここで悲しいことに校則を破っていたものがある。そのものには減点が必要じゃ。ジェレミー・ポッター。立ち入り禁止の四階の右側の廊下に行っておった。それに、禁じられた森にも行っていた。また盗みも行っている。これらも含めスリザリンを100点減点じゃ」

一斉に全ての人が僕の方を見てきた。

スリザリンの人から見れば僕はクイディッチを優勝に導いた人だ。それが、いきなり100点も減点させられることをしていたなど言われたら、驚くだろう。

いや、それだけじゃすまない。

けれど、言っていることは事実なのだ。

ただ、「とても痛い死に方をしたくない人は今年いっぱい4階の右側の廊下に入ってはならん」としかダンブルドア先生は言っていない。

痛い死に方もしなかったし、逆に楽しかったのだ。

ケロちゃんと友だちになれたのもあそこのおかげだし、マイと付き合えるようになったのもあそこのおかげだ。

だから、僕は何も言えない。

言っただとしても信じてもらえない。

「静かにするのじゃ」

ブーイングをしていたスリザリンの生徒の声が止む。

まだ、1位から落ち合たわけでもないからだ。

「そして、ハーマイオニー・グレンジャー。彼女は知識を求めるあまり道を少しばかり違えたようじゃ。そこで、グリフィンドールを

50点減点」

ただでさえ、グリフィンホールに友だちのいないマイがグリフィンホールを落としてしまうことをすることは致命傷だ。マイの席を見ると顔を伏せてじっとしている。まわりは好奇の目と侮蔑の目を向ける。

止める！

そう叫びたかった。

けれど、僕たちはこの学年度末のパーティーを台無しにした1人だ。

僕ら2人はただそこに座るだけで何もできることはなかった。

唯一言えるのはマルフォイとスネイプ先生だけが何かわかっているという目をしていていたのが救いだった……。

このパーティーが終わるとマイと僕は逃げるようにすぐ大広間をでた。

すると、ダンブルドア先生が目の前に現れる。

「校長室に来てもらっていいかの？」

「……………はい」

僕だけ前に来たことのある校長室の中に入る。そこにはスネイプ先生もいた。

「さっそくじゃが、ジェレミー、グレンジャーの2人のどちらかが賢者の石を持っておるのじゃろっ?」

「……………そうです。僕が持っています」

「何故じゃ？」

「あの罨をクリアしたからです」

「それは方法じゃろう？ 何故じゃ？」

「「賢者の石を見たかったからです！！」」

「はい？」

「それだけです。きっかけとしてはハーマイオニーが間違って入ってしまった部屋で三頭犬を見たのがそうでした。けれど、僕がその後三頭犬と友だちになったのが悪かったんです」

「友だちじゃと？」

「はい。ケロちゃんと友だちになってから扉の下に何が隠されているか聞いて、興味がわいたので取りに行きました。罨自体は簡単だったんですでしたけど」

「罨が簡単じゃと？ いや、それならみぞの鏡を攻略できたのにも納得できるが……………。わかった。2人とももう良い。けれど、今後一切危険なまねはしてはならん。禁じられた森だっそうじゃ。あそこは危ない。何がでるかわからん」

「わかりますよ。あの森の子たちともお友達なんで」

「友だち、友だち言っておるがそんな簡単になれるものではないかな」

「わかりません。僕も生まれつき動物とはなせまずし、相手もすぐなついてくれます。だから大丈夫です。禁じられた森に入る許可を下さい」

「……………考えておこう」

僕の気迫に負けたのかそう返事してくれた。
横で聞いていたスネイプ先生は驚いたかおをしていた。

「とりあえず、2人は戻ってくれ。僕はとりあえず先生たちと話さなければならん」

「わかりました」

ダンブルドア先生だけが1人納得した感じで終わった。

結局僕たちがどうなるのかわからずじまい。

それに、なんで僕たちが持つてゐるってばれたんだ？

そんなそぶり糸では感じられなかったが。

それに、何故かハリーとロンに点数が増えたのは納得いかなかった。さつきは優勝できたことやっ自分のことだけでいいっぱいだった。が今考えてみるとおかしい。

ただ、勝手に入っていて、けがしただけで得点なんだ。

僕はけがもせず取って、『例のあの人』から守ったんだぞ。

マイも同じ相当困惑している。

なんと締めりの悪い学年度末のパーティーになってしまった。

学年度末パーティー（後書き）

これで賢者の石は終了となります。
次は秘密の部屋になります。

ハーマイオニーの家（前書き）

秘密の部屋編開始となります。

ハーマイオニーの家

あの締めりの悪い学年度末もあのまま、なあなあと終わってしまい夏休みに入った。

とりあえず、3日間は漏れ鍋を予約してあるのでそこに止まる。

そのあと、マイの家に行く。

しっかり者のマイのことなので、夏休みに入る前にフクロウで手紙を渡してあった。

そのおかげで、娘が帰ってきて3日目で彼氏ともだちを迎えることができる。とってもありがたいが、いいものなのだろうか？

友だちは友だちでもボーイフレンドだからな……………。

とりあえず、マグル育ちだから勝手が違うなんてことはないだろう。

そんなわけで、ドラゴンに乗ってマイの家に向かっている。

かなり上空を飛んでいるから見つかることはないと思うが、一応透明化の呪文を書けている。

心配なのはたまに通る飛行機だ。

ドラゴンもそれなりに速いはずだが、飛行機と比べると少しばかり劣る。

それは、人を乗せているからだ。

そんな速度で生身の人間が乗っていたら耐えれない。

一応魔法もあるにはあるが常時展開なので、少しでも集中力をなくしたら凍えて死んでしまう。

まあ、自家用飛行機（少し遅い）があるだけ一般のマグルから見れ

ばすごいだろうが。

20分ばかり飛ぶとマイの住む地域がみえてくる。
ここからはアウリアに変えておりていく。

アウリアを最初から使えば、暖炉でも行けないこともないのだが。
近代化した家には暖炉があることの方が珍しい。
それで、暖炉を使って行けないのだ。

他の魔法使いたちにとって、このごろの移動は少しばかり大変だろう。

そうこうしている内に、マイの家の前まで来る。

この時間はまだ歯科医をやっているようだ。

お昼休みの時まで外をぶらついておく。

マイの住んでいる場所となると、将来住む可能性のある場所だから
しっかり見とかなければならない。

それに、長い間ここでお世話になるのだから、地理の把握は基本だ。

大型のスーパーマーケットやコンビニエンスストア、ハンバーガー
ショップなどなど。

大通りの方にとると一通りそろっている。

かなり便利な所だな。

それに、魔法使いがないのがいい。

魔法使いばかりだとハリーのことを聞かれたり、学校と同じだった
りとストレスがたまるのだ。

こういう所での息抜きというのはすごく大事だと思う。

とりあえず、マイの家の方にまた戻り、途中の公園による。

いくつかあるベンチに腰をかけ、自動販売機で買った冷え冷えの炭酸飲料を開ける。

プシュツという炭酸の抜ける音と共に炭酸飲料特有のの甘い匂いが漏れる。

昼食時に近い公園にはあまり人がいない。

けれど、子供たちは少ないながらも笑って遊んでいた。

それを見ながら飲む炭酸飲料はとても気持ちのいいものだった。

「だーれだ？」

そついわれいきなり目隠しをされる。

この近くで知っている人などマイくらいしかない。

「マイだろう？」

「正解！ 来てたならどうして家にこないのよ」

「君のお父さんがまだ仕事をしているのに行ったらまずいかなって思ってたね」

「そうね。私もボーイフレンドよって紹介したいわ」

「じゃあ、今から行こうか。どうせ、わかってて聞いたんだろう？」

それに時間的にもちょうどいい」

「てへっ」

可愛らしく舌を出しながら言うマイにドキッとしてしまうのは仕方ないことだ。

なぜなら僕の彼女だからね。

かわいいかわいい彼女だからね。

こうして、僕はマイのうちに入って行くのだった。

アーロン・グレンジャー

マイの家は表から見ると歯科医、裏からはどこにでもあるような家にみえた。

パターの練習ができるくらいの庭に、新車の入ったガレージ。散歩中に見た家と同じだ。

けれど違うといったら手入れされている花だろうか。

庭の隅にあるそれはとても色鮮やかに、静かに咲いていた。

その美しさには目を奪われる。

それが恋人のうちの花だという、補正があるのかもしれない。

ただ、それでも美しいと魅了させるこの花は、魔法のようだった。

玄関の扉を開け先にマイが入る。

「ただいまー」

「おかえり」

「おかえりなさい」

ハスキーボイスの男の人の声と、有名な歌手を思わせるような高く透き通った女の人の声が中から聞こえる。

「紹介したい人がいるわ。レミー入って」

マイが僕を中へ通す。

そこにいたのはまだ十分に若いといえる男女2人が立っていた。

ああ、この人たちがマイのご両親なんだと思う。

何故かこの人たちを見るとマイがこんなにも聡明で可愛らしく産ま

れてきたかがわかる。
だからこそ、しかり挨拶をしなければ。

「初めまして。ジェレミー・ポッターです。ハーマイオニ？のボーイフレンドをやっています」

「あらあら、あなたがハーミーマイのボーイフレンドなのね。とても凛々しそう」

「そうだな。それにハーミーマイと同じように聡明そうだ」

「ありがとうございます」

「ジェレミー君、敬語なんて使わないでくれ。私たちはもう家族じゃないか」

「そうですよ。ハーミーマイからも言ってあげなさい」

マイはこっちを向きながら少しヤレヤレといった表情で僕を見ながら、

「レミー、いつも通りでいいのよ。そんなかしこまる必要はないわ」

「そうみたいだ」

マイの両親に向き直り、話そうと思うが名前を聞いていなかった。

「そういえばあなた、まだ私たちの名前を言ってないわ。私はエリサです」

「私はアーロンだ。娘のことを頼むよ。それと、これからのことが客間が空いているからそこを使ってくれて構わない。朝食、昼食、夕飯は家族全員で取るのが基本だから君もその時間は家にいるように。何かあれば朝のうちに言ってもらえると助かるよ。それと、マイのことをしっかりと頼むよ」

「はい！」

「それじゃあ、ゆっくりしてってくれ。私たちは仕事の用意があるからな。つもる話もあるだろうがそれはまた夜にでも」

「そうしましょう」

そう言つて、アーロンさんは仕事場に行つてしまった。

昼休みは長いと思うんだけど、たぶん娘のボーイフレンドが来たから思う所があるんだろう。

こればかりは仕方ないだろう。

まあ、僕に親がいらないから全部想像でしかないんだけど。

そんな感じで、マイの両親との初対面は終わった。

アーロン・グレンジャー（後書き）

本編の方にまだ入らないので、短い話が多くなるかもしれませんが、これからもよろしく願います。

ダイアゴン横町再び（前書き）

投稿遅くなりすみません。

リアルの方が忙しく何も手を付けられていませんでした。

毎日更新は11月に入ってからになると思います。（あくまで予定です）

これからも読んでくださると嬉しいです。

ダイアゴン横町再び

それから数週間が過ぎ、再びホグワーツに行く時期が近づいた。学校からのフクロウが今学期にいるものを書いた手紙を持ってきたのが、それを実感させる。

マイの両親は忙しく、少ししかはなせないことがおかつたが、とても良い人柄をしており、人格者でもあった。

しかしそんな中、休みをもうけてダイアゴン横町に連れて行ってくれることになる。

僕とマイはとっても嬉しかった。

初めて親というものができた気がして、家族のぬくもりつてのういのを言うんだなって。

だから、マイと付き合えることがとっても嬉しいし、グレンジャー家が大好きだ。

そんなことで、今フローリシュ・アンド・ブロッツ書店にいる。

『基本呪文集（二学年用）』

ミランダ・ゴズホーク著

泣き妖怪バンシーとのナウな休日

ギルデロイ・ロックハート著

グールお化けとのクールな散策

ギルデロイ・ロックハート著

鬼婆とのオツな休暇

ギルデロイ・ロックハート著

トロールとのとろい旅

ギルデロイ・ロックハート著

バンパイアとばつちり船旅

ギルデロイ・ロックハート著

狼男の大いなる山歩き

ギルデロイ・ロックハート著

雪男とゆつくり一年

ギルデロイ・ロックハート著

「今回買う本の内容どう思う？」

「あきれてものもいえないくらい、ダメね」

「僕もそう思うよ。この人の書いている本は、まるで自分がやったような感じがしていて、うさんくさい」

「そうね。他の本と比べて優しすぎるくらいね。トロールと旅なんてできるわけないわ。間違ってこん棒を振り下ろされておしまいじゃないかしら」

「そうだね。お母さんも狼男とは知り合いで温厚な正確みいだっただけど、『例外！』って大きく書いてあったし」

「「買う価値ないね！」「」」

「でもさ、ホグワーツに行くなら買わなきゃいけないよ」

「どぶにお金を捨てたつもりで買うわ。お母さんとお父さんには申し訳ないけど」

「仕方がないよ。僕も同じような気持ちさ。今学期が終わったらすぐに売らないかい？」

「それがいいわね。綺麗にしておけばいくらか戻ってくるだろうから」

そんなことを小声で話しながら、さつさと買う。

今日は残念ながら、ギルデロイ・ロックハートのサイン会が10分後にあるからだ。

世間的には彼は人気みたいだから。

それに、お店の中にもそれ目当ての人が多いからね。

マイの分の本も僕のカバンに入れてお店の外に出る。

その途中、マルフォイらしき影を見たが、すぐにお店の中に入ったのでわからなかった。

もうすぐしたら会えるんだから気にしても仕方がない。

その後魔法薬の品で足りなくなってるものや、魔法具などを見て回り、昼頃にはダイアゴン横町をでて町中で昼食にした。マグルの世^{いっしょ}界を4人で回った。

魔法界よりも僕が知らないものが多く、買いたいものがいっぱいあり、それに気付いたグレンジャー夫妻が買ってくれた。

その時はマイが説明したりしてくれ、とっても有意義な日になったと思う。

それから数日後、僕らは9と4分の3番線にいる。

汽車の中で（前書き）

すみません。

毎日投稿は難しいです。

ちょこつとづつの更新になりますがこれからもよろしく願います。

汽車の中で

「こっちの席が空いてるよ」

「そうみたいね。少し早くつきすぎたかしら」

「べつにそうでもないんじゃない？　だってちらほら来始めてるし。遅れるよりは早い方がいいに決まってる。それに君のお父さんたちも病院の方を午後から開けないといけないんでしょ？」

「そうね……これから一年会えないって思うと悲しいけど、レミーといれるのは嬉しいし」

「ありがとう」

コンパートメントの外を通る足音はだんだんとうるさくなり、話し声も聞こえてきた。

けれど、僕とマイの空間だけは静かでゆったりとした時間が流れている。

僕たちは本を広げ頭の中で何度となく魔法を使うシミュレーションをする。

マイの家にいる時、魔法が使えないから練習ができないわといったので、この方法を教えてあげた。

必要の部屋でなんとなく実際練習した僕だけど、イメージは大切だ。

呪文の思考詠唱もできる。

母さんのノートにダンブルドア先生が使っていると書いてあったのでやってみたが1ヶ月しないうちにできた。

ぜひ、マイにも習得してもらいたい。

到着する十分前にローブに着替える。
もちろん1人づつ。

べつに僕は一緒でもいいんですけど。
マイが恥ずかしがってね。

「イツチ年生はこっちだぞー。イツチ年生はこっちに来ーい」

特徴的なハグリッドの声が夜のホグワーツに響く。

ただ僕たちはもう一年生ではない。

だから、上級生の向かう方に歩いて行く。

ハグリッドにはまた挨拶しに行くとは思うけど。

「この馬車に乗るみたいね」

そう、マイが言う。

ただ馬車は馬車だが………馬が引いていない。
代わりにセストラルがつながれていた。

「でも、馬がつながれてないわ。魔法で動いているのかしら？」

「違うよ。セストラルが引いてるんだよ。セストラルは、死を見た
ことがないと見れない生物だからね」

「そうなの………」

「でも、この子たちはいい子だから安心して乗って」

「わかったわ」

馬車に乗り込み、セストラルに声をかける。

『久しぶりだね』

『そうですね』

『元気にしてた？』

『はい。ハグリッドがいいえさを持ってきてくるので』

『今日はよろしくね』

『まかせてください』

マイが奇妙な目で見てくる。

「このこと話してただけだから」

「あなたってすごいわね。セストラルとも会話できるなんて」

「それほどでも……………」

こうして馬車は揺れながら進んで行く。
大きな大きな、ホグワーツに向けて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1994v/>

ハリー・ポッターの弟は母親似

2011年11月21日01時45分発行